里、千葉蓮を產す。滇水は源廣く、末狹くして倒流に似たるあり。故に滇といふ云々の語見えたり。當時は此の地が益州郡に屬したる由通鑑の註にも記されたり。

漢の武帝の朝彩雲南中に見ゆ。是よりして雲南の名生じたりといふ（廣輿記）。

當時此の地方に群を爲せる南蠻は、多く苗族にして、所謂夷獠の徒なり。敎師あらず、禮義を知らず。性、獰猛獷悍、或は林に隱れ或は洞に棲む。而して利を貪り戰に勇み反覆常なし。殊に春夏の候は瘴疫甚だ多ければ、之を攻むるものは蠻勇と戰ひ、病熱と戰はざるべからず。或は鐵或は火、たゞ猛烈に之を攻め滅ぼすこと、亦未だ易からざるものあり。況んや此の如き蠻族に對して心戰を試むるをや。

孔明の軍を行る。常に王者の師たるを失はず。城を攻むるよりも寧ろ敵の心を攻めたり。今之を蠻族に試みて、猶ほ此の如き效果を收むるを得たり。昔し羅馬の英雄ユリウス、ケイザルがガリアの太守たること八年、彼のゲルマニの諸蠻族に對して粗〻心戰を試みたるの跡あり。古今の英雄多しと雖も、多くは單に敵軍を擊破し粉齏するを以て足れりとするものゝ如し。所謂心戰の難きこと推して知るべきなり。孔明の南征するや、威を以て之に臨み、恩を以て之を撫し、信を以て之を用ゆ。此の如くんば野獸と雖も服すべし。南蠻また人なり。如何で心服せざらんや。

世に傳ふる『孔明異傳兵法』將器の條に曰く、

誠信寬大にして理亂に閑ふ。隱々紛々として隣國皆服す。上は天文を知り、下は地理を察し、中は人事を悉くさば四海のうち親しきこと室家の如し。此れ天下の雄將敵すべからざるなり云々。

此の書は恐らく僞書なるべしと雖も此の言は偶〻以て孔明其の人の用兵を說き得て適切なるものあり。胡致堂は曰く、

南中の師は此れ孔明が遺を受け、政を輔くるの第一擧なり。蓋し昭烈初めて崩じ主幼にして國疑ふ。彼の雍闓猛獲乃ち益州の境內に於て此の不軌を爲す、若し稍寬宥を加ふれば、則ち兵を用ふるの始め、何を以て其の餘を警しめ、其の後を圖らんや。故に七縱七擒するは特に威を一孟獲に示すに非ず。其の

中原を服して漢賊を清むる所以のもの、皆此の威を以て之が兆と爲す。

七擒七縱は寛宥ならずとせず。孔明の眞意恐らくは寛嚴以外に在るべし。たゞ威信を示したるは之を一孟獲に示したるにあらずして之を天下に示し、以て漢賊を清むるの兆となせしことは胡氏の言の如くなるべし。

(三) 南征雜事

南中の役は建興三年の春よりして冬に亙りたる一大外征なれば之に關する雜說を左に揭げん。

(一)諸葛公が南蠻を征したる時、人あり公に語りて曰く『蠻地は邪術多し。須らく神に禱り、陰兵を假りて以て之を助くべし。然れども其の俗必ず人を殺し、其の首を以て祭れば神之を享く。斯くして兵を出すべし』と。公從はず羊豚の肉を雜用し、之を包むに麵を以てし、人頭に像りて以て神を祀る。神亦享けたり。後人此より饅頭を造る。

(二)邛州・沈黎縣は即ち孔明征羌の路なり。十里毎に一石樓を作り鼓聲相應せしむ。今夷人之に倣うて、居る所悉く石を以て樓をつくる。

(三)諸葛營は宜良縣の南、小石嶺に在り。亮曾て此に營す。又た諸葛峒と名づく。

(四)諸葛山は通海縣の東南三里に在り。亮、南征して兵を此に駐む。

(五)武侯廟は司城(永昌)の南、十里に在り。諸葛公孟獲を擒にして此に屯營す。民其の德を懷ひ祠を立てゝ之を祀る。今に至りて土人自ら諸葛の遺民と稱す。因りて諸葛村と名づく。元の揭傒斯が詩に

桓桓蕭將軍　雙旌出永昌
下馬城南祠　爲我酹一觴

といへるもの即ち是なり。

(六)武侯城は都司城の南三十里瀘水の東に在り、亮之を築く。所謂五月瀘を渡る處。瀘州は即ち孟獲を擒にするの地なり。司城の北五里に武侯廟あり。宋の紹興中、郡守邵溥舊鼎に因り、新に牓して天威廟といふ

(七)孟山は榮經縣の東二十里に在り。諸葛公、孟獲を擒にする處。下に七縱橋

あり。又孟獲城あり。司城の東二里に在り。孟獲が築く所なり。

(八)蜀漢の建興三年、諸葛武侯、南して雍闓を征し、師白崖川に次す。闓を獲て之を斬り龍祐那を封じて酋長と爲し、姓を張氏と賜ふ。永昌益州の地を割きて雲南郡を立つ白崖の諸夷、侯の德を慕ひ漸く山林を去り、徙りて平地に居る城邑を建て、農桑を務む。諸郡是に於て始めて姓氏有り。

(九)蜀漢の時、火濟といふものあり。丞相亮に從つて孟獲を破りて功有り。羅甸國王に封せらる。即ち今の宣慰使安氏の遠祖なり。

(十)銅鼓山は衞城西四十五里に在り。相傳ふ、蜀漢諸葛亮南を征して此に銅鼓を得たりと。

(十一)銅鼓交趾服役す。頭飛獠子、赤裩獠子、鼻飲獠子あり。皆窟居し巢處す。好んで酒を飲み、銅鼓を擊つ。鼓初めて成り之を庭中に置き、同類を招く。來る者門に盈つ。豪富の女子は金銀釵を以て鼓を擊つ。叩き竟り之を留めて主人に與ふ。或はいふ、銅鼓は乃ち諸葛征蠻の鉦なりと。

(十二)蠻は銅鼓を呼んで諸葛鼓といふ。相傳へて以て寶器と爲す。鼓に剝蝕ありて又聲の響くものを上と爲す。上鼓は牛千頭に易ゆ。次に七八百頭、遞等差有り。藏して二三面に至るものは、即ち一方に雄視するを得、王號を僭稱す。

(十三)苗民、家々武侯の像を祀る。

以上は諸書に散見する所のものなるを明の王士騏之を輯集して、武侯集中に收めたり。固より悉く之を信ずべからずと雖も、亦故人の遺蹟を想ふべきものあり。今其の要を拔きて摘譯す。

第十四章　北征

(一)　前出師表

關羽、玄德の怨を忘れて吳と連和したるも、瘴烟蠻雨の間に突進して南中を征定したるも、皆是れ大に北出して魏を伐たんとするの豫備的行動に過ぎざりき。今や南蠻既に平らぎて後顧の患なきに至りしかば、孔明は糧を積み兵を練り、密

かに兵を漢中に集めて以て北出の準備に汲々たりき。此の間暫らく魏吳の形勢を語らん。

建興元年、鄧芝、吳に使してより、蜀吳の好みは舊に復して、魏吳の戰は殆ど絶え間なかりき。建興四年には魏文帝殂して太子叡位に即く。明帝是なり。帝亦沈毅にして才識あり。曹操の孫たるに慚ぢざるものなり。孫權は魏の大喪に乘じ、建興四年八月、自ら將として江夏郡を攻め、左將軍諸葛瑾をして襄陽を侵さしめたるが皆敗れて退きたり。吳は魏に對して、獨力にして攻勢を取ることは殆んど不可能なり。蜀と相俟たざるべからず

建興五年には、孔明が魏を伐つの準備全く成りしかば、長史張裔と參軍蔣琬とをして留まりて、府事を統べしめ、自ら諸軍を率ゐて漢中に出でんとす。發するに臨み上疏して曰く、

臣亮言、先帝創業未レ半、而中道崩殂。今天下三分、益州疲敝。此誠危急存亡之秋也。然侍衛之臣、不レ懈於內、忠志之士、忘身於外者、蓋追先帝之殊遇、欲レ報之於陛下也。誠宜開張聖聽、以光先帝遺德、恢弘志士之氣、不宜妄自菲薄、引レ喩失レ義、以塞忠諫之路也。宮中、府中、俱爲一體、陟罰臧否不宜異同。若有作レ奸犯レ科、及爲忠善者、宜付有司、論其刑賞、以昭陛下平明之治、不宜偏私使內外異法也。侍中、侍郎郭攸之、費禕、董允等、此皆良實、志慮忠純、是以先帝簡拔、以遺陛下。愚以爲、宮中之事、事無大小、悉以咨之、然後施行。必能裨補闕漏、有所廣益也。將軍向寵、性行淑均、曉暢軍事、試用於昔日、先帝稱之曰能。是以衆議擧寵爲督。愚以爲營中之事、事無大小、悉以咨之、必能使行陳和睦、優劣得所也。親賢臣、遠小人、此先漢所以興隆也。親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頽也。先帝在時、每與臣論此事、未嘗不歎息痛恨於桓靈也。侍中尚書、長史、參軍、此悉貞亮死節之臣也。願陛下親之信之。則漢室之隆可計

日而待也。臣本布衣、躬耕南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、遂許先帝以驅馳後値、傾覆受任於敗軍之際、奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹愼、故臨崩寄臣以大事也。受命以來、夙夜憂慮、恐付託不效以傷先帝之明。故五月渡瀘、深入不毛。今南方已定、甲兵已足、當奬率三軍、北定中原、庶竭駑鈍、攘除姦凶、興復漢室、還于舊都。此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。至於斟酌損益、進盡忠言、則攸之・禕・允之任也。願陛下託臣以討賊興復之效。不效則治臣之罪、以告先帝之靈。若無興德之言、則責攸之・禕・允等之咎、以彰其慢。陛下亦宜自謀、以諮諏善道、察納雅言、深追先帝遺詔。臣不勝受恩感激。今當遠離、臨表涕泣、不知所云。（前出師表）

此の擧や二十有一年來、須臾も忘れざる漢室興復の志を遂ぐべきものなれば、孔明の爽快なる意氣、愼重なる用意、想ひ見るべきなり。殊に出師表に至りては、正大の氣、至誠の情、千歲の下、人をして泣かしめざれば已まざるものあり。試に諸家の言ふ所を聽かん。

蘇東坡曰く

孔明不以文章自名、而開物成務之資、綜練名實之意、自見於言語、至出師表、簡而盡、直而不肆、大哉言乎　與伊訓說命、相表裏、非秦漢以來、事君爲說者、所能至也

胡致堂曰く

孔明一代之英、遠謀宏議、無一不售者、至其自明之語、曰謹愼而已、詩不云乎、惟此文王、小心翼々、若亮者、有文王之小心矣、彼劉禪凡庸、孔明事之盡道、非盛德、孰能臻此。

尹起莘曰く

其正大氣象、讀之凜々、猶有生意、義聲充滿於天地之間者矣。

又支那の學問と人物とを痛罵したる平田篤胤も、西籍慨論に於て左の如くいはれたり。

其のかける出師の表といふ文を讀で見まするに、これは諸越の人も、孔明が出師表を讀で涙を落さゞる人は、その人必ず不忠の人ならんと云たる如く、おぼえず身もふるはれ、實に〳〵涙のこぼれるほど、實意のよく見える文で此の人生涯の行ひは、から人ながら篤胤實に間然する能はず。孔子の後、たつた一人の人と思はるゝ。かのから人のよく云説に、五百年ほどづつに、聖人を出すといふが、この説はいふに足らねどしばらく依ていへば、孔子の後には孔明が、そこらに當るでござる。諸越の人の言に、孔子以前無孔子、孔子以後無孔子、と云ふたが、篤胤は孔子以後唯有孔明と思はるゝことでござる云々。

文王武王は勿論、支那歴代の偉人を罵倒したる篤胤をして、孔子以後の一人なりと激稱せしめたる孔明の人格は、即ち一篇の出師表なり。

句法を整頓し、文字を洗錬するは所謂文章家の文章なり。出師表の如きに至りては然らず。文章即ち人格なり。滿腔の精神迸しりて聲を爲すもの、一言一句皆熱誠なり。眞面目なり。故に後人をして出師表を讀んで泣かざるものは忠臣に非ずと、いはしむるの權威を具備せり。之を讀むものは先づ自ら省みて之を讀むの資格あるや否やを再考して可なり。

(二) 街亭の役利あらず

孔明、漢中に在りて猶ほ未だ動かず。魏明帝之を聞き、大に兵を發して漢中を攻めんとし、之を散騎常侍孫資に問ふ。孫資曰く『武皇帝(曹操)は兵を用ふるに於て聖なるも、蜀賊が山巖に棲むを察し、吳虜が江湖に竄するを視、皆曲げて之を避け將士の力を責めず。一朝の怒を爭はず。誠に所謂勝を見て戰ひ、難を知つて退くなり。今若し軍を進め南鄭に往きて亮を討たば、道既に險阻(中略)天下騷動し、力を費すこと廣大ならん』と。明帝其の言を聽き唯諸將をして險要を守らしむることゝなしぬ。

孔明は一面に於ては、直ちに北して關中に出でんとし、又一面に於ては當時荆州新城の守將たる孟達を誘ひて、兵を擧げしめんとせしが荆豫州の軍事都督司

馬仲達之を悟り、僅に八日にして新城に逼り、攻圍十六日、城を拔き孟達を斬りしかば、孔明が荆州に動亂を起さしめて魏の肺腑を衝かんとしたるの計畫は破れたりき　彼の仲達の敏活亦侮るべからざるものありといふべし。

孔明は直に北出して魏を伐つべきのみ。依りて諸將と戰略を議す。丞相司馬魏延曰く『聞く夏侯楙は怯にして謀無しと。今延に精兵五千、負糧五千を假さば、直に褒中より出で、秦嶺に循ふて東し子午に當りて北し、十月を出でずして長安に至るべし。楙は延が奄至するを聞かば必ず城を棄てゝ逃れん。長安の中唯御史と京兆太守とのみ。横門邸閣の積粟と散民の穀とは以て我が糧として足るべし。東方相合聚する比ほひ尚ほ二十日ばかり、而して公は斜谷より來る。亦以て達するに足る。此の如くんば、咸陽以西一舉にして定むべきなり』と。

當時魏の安西將軍たる夏侯楙は夏侯淵の子にして、曹操の女清河公主を娶り、最も文帝と親善なりしかば敢て武略あるものにあらざりしも、關中一切の軍事を都督して、長安に在り。魏延の如きは既に〳〵之を輕侮したること疑なく、奇計を出して奇功を收めんとしたるも之が爲めなり。然れども孔明は延が計を用ゐざりき。蓋し危道を避けて、十全必勝の計を撰びたるなり。

孔明先づ斜谷道に由りて郿を取るを揚言し、鎮東將軍趙雲、揚武將軍鄧芝をして疑兵を爲して箕谷に據らしめ、孔明自ら大軍を率ゐ出でゝ祁山を攻む。戎陣整齊にして、號令明肅なり。

玄德の崩じてより數年、蜀人は何事を爲しつゝあるか、寂然として聞くことなかりしかば、魏は關中の防備を怠りたりき。而して今は孔明が突如として祁山に出づるあり。朝野之が爲に震駭す。天水、南安、安定、の諸郡は皆叛きて孔明に應じたり。彼の天水の俊傑姜維(字は伯約)が孔明に隨身するに至りたるも此の時なり。

魏の朝臣頗る狼狽の色あり　明帝曰く『亮、山を阻して固めと爲す。今は自ら來る。正に兵書に人を致すの術と合せり。亮を破ること必せり』と。乃ち右將軍張郃に兵五萬を與へて孔明を拒がしめ、帝また自ら長安に往きて之が聲援を爲したりき。

孔明は舊將たる魏延、吳懿等を以て先鋒と爲さずして、馬謖に諸軍を督せしめ

て前に在り。謖進んで張郃と街亭に戰ふ、謖は馬良が弟にして、才氣人に過ぎ好んで兵を論ず。孔明深く之を愛したり。玄德嘗て臨終に際し、孔明に語りて曰く『馬謖は言其の實に過ぎたり。大に用ふべからず。君之を察せよ』と。孔明は猶ほ謖を信愛すること已まず、毎に引見して談論し、晝より夜に達したり。是を以て謖稍々驕る色あり。遂に孔明の節度を用ゐず。張郃と相遇ふに及びて、水を捨てゝ山に上り、城に據らず。舉措また煩擾なり。

張郃は幾十年來戰場に馳騁して、武勇あり、策略あり。當時魏の良將の一人なりしかば、先づ馬謖が軍の水道を絶ち、擊つて大に之を破る。謖が士卒悉く離散せり。孔明は進んで據る所なかりしかば、西縣千餘家を拔き、姜維等の降人を收めて漢中に歸れり。

馬謖が己れの才略に誇り、孔明の節度に從はずして此の一大失敗を來したることなれば、軍令を正さんが爲め、謖を獄に下し、涙を揮つて之を斬る。謖、終りに臨みて孔明に書を與へて曰く、

明公、謖を視ること猶ほ子の如く、謖の明公を視ること猶ほ父の如し。願はくは深く鯀を殛して禹を興すの義を惟ひて、平生の交を此に虧かざらしめよ。

謖死すと雖も黃壤に恨無きなりと。（襄陽記）

馬謖は丁得に孔明の信任を得たるに背かざるものあり。其の最後の書の何ぞ正大にして悲愴なる。言々血を帶びて滴々聲をなすに似たり。十萬の兵皆之が爲に泣けり。謖時に二十有九、孔明自ら臨みて之を祭り、流涕禁ぜず、其の遺孤を撫して恩平生の如くなり。

蔣琬、孔明に語りて曰く『天下未だ定まらずして智計の士を戮す。豈に惜しからずや』と。

孔明、涙を垂れて曰く『孫武の能く勝を天下に制する所以のものは、法を用ふること明らかなるを以てなり。是を以て揚干（晉の悼公の弟）法を亂せば、魏絳（晉の將）其の僕を戮す。四海分裂し、兵交方に始まる。若し又法を廢すれば、何を以て賊を討たんや』と。其の人は惜しむべく、其の法は廢すべからず。斬らるゝものは猶ほ可なり。斬るものゝ心中如何。最も想ひ見るべきなり。

謖の未だ敗れざるや、裨將王平といふもの、數々謖を諫む。謖之を用ゐず。兵

敗るゝに及びて衆悉く散亂せしが、獨り王平の領する所の一千人のみ、隊伍整齊として自ら守りしかば、張郃も敢て逼らず。王平徐々として兵を收めて退けり。是れ殊勳なり。乃ち平を參軍に拜し、位を討寇將軍に進め、亭侯に封じたり。其の他將軍李盛を誅し、將軍黃襲等の兵を奪ひ、以て軍中の賞罰を明らかにしたり。而して孔明の己れを處すること如何。上書して自ら三等を貶せんことを請ふ。曰く、

臣以弱才、叨竊非據、親秉旄鉞、以厲三軍、不能訓章明法、臨事而懼、至有街亭違命之闕、箕谷不戒之失、咎皆在臣、授任無方、臣明不知人、恤事多闇、春秋責帥、臣職是當、請自貶三等、以督厥咎。

後帝劉禪は孔明の意を諒とし右將軍となして、丞相の事を行ひ、總統すること前の如くならしむ。

或人、孔明に勸めて、更に大に兵を發せよといふものあり。孔明曰く、『大軍の祁山、箕谷にある、皆賊よりも多し。而も賊を敗ること能はずして、賊の爲に敗らるるは、則ち此れ病ひ兵の少きにあらず。一人に在るのみ。今、兵を減じ將を省き罰を明らかにし、過ちを思ひ、變通の道を將來にはからんと欲す。若し然ることの能はずば、兵多しと雖も何の益あらん。今より以後、もろ〳〵の國に忠慮あるもの、吾が闕を攻めば、則ち事定むべく、賊死すべく、其の功足を蹈てゝ待つべし』と。遂に或人の言を用ゐず。微勞を考へ、壯烈を顯はし、咎を引きて身を責め、過失を天下に公にし、兵を勵まし武を講じて以て後圖を爲せしかば、戎士簡練し民皆其の敗を忘れたりき。

孔明が滿腔の熱誠、精力、希望を集注したる北征の第一擧は遂に其の功なくして已めり。人或は魏延が計を用ゐざるを以て孔明を怯なりとし、或は奇正の妙諦を解せざるものとす。吾人思ふに王者の師は、先づ自ら不可勝を爲し以て敵の可勝を俟ち、全道を擇びて危道を踏まず。風の如くに動かんよりは、山の如くに靜かなるべし。其の一敗地に塗れて大事の水泡に歸するを恐るればなり。孔明が延の計を用ゐざりしは誠に所以あり。彼の明帝は侮るべきものに非ず。延が計にして失あらば、事忽ち收拾すべからざるに至らん。兵を整へ陣を張り旗鼓堂々として相對す。當時恐らくは孔明に敵するものなかるべし。何を苦

しみてか一時を僥倖せん。近功小利を求むるに急なるは、孔明の慚づる所なり、孔明の北出するや、吳も亦魏と戰ふ。孫權自ら兵を進めて皖に至り、陸遜を大統督となして、魏の將曹休と石亭に戰はしむ。（建興六年八月）遜自ら中部を領し、朱桓・全琮を左右の翼と爲し、三道並び進みて休が軍を衝き、大に之を破り、逃ぐるを逐ひて夾石に至る。斬獲萬餘。曹休爲に慚憤し、疽を背に生じて死せり。

（三）後出師表

曹休大敗して、魏兵南下し、關中の地虛弱なり。孔明之を聞きて時乘ずべしと爲し、再び兵を出す。後皇帝に上書して曰く

先帝深慮、漢賊不兩立、王業不偏安、故託臣以討賊、以先帝之明、量臣之才、固當知臣伐賊之才弱敵彊、然不伐賊王業亦亡、惟坐而待亡、孰與伐之、是故託臣而弗疑也、臣受命之日、寢不安席、食不甘味、思惟北征、宜先入南、故五月渡瀘、深入不毛、臣非不自惜也、顧王業不可偏全於蜀都、故冒危難、以奉先帝之遺意、而議者以爲非計、今賊適疲於西、又務於東、兵法乘勞、此進趨之時也、謹陳其事、如左、高帝明並日月、謀臣淵深、然涉險被創、危然後安、今陛下未及高帝、謀臣不如良・平、而欲以長計取勝、坐定天下、此臣之未解一也、劉繇・王朗、各據州郡、論安言計、動引聖人、羣疑滿腹、衆難塞胸、今歲不戰、明年不征、使孫策坐大、遂并江東、此臣之未解二也、曹操智計、殊絕於人、其用兵也髣髴孫・吳、然困於南陽、險於烏巢、危於祁連、偪於黎陽、幾敗伯山、殆死潼關、然後僞定一時耳、況臣才弱、而欲以不危定之、此臣之未解三也、曹操五攻昌霸不下、四越巢湖不成、任用李服、而李服圖之、委夏侯、而夏侯敗亡、先帝每稱操爲能、猶有此失、況臣駑下、何能必勝、此臣之未解四也、自臣到漢中、中間朞年耳、然喪趙雲・陽羣・馬王・閻芝・丁立・白

壽劉郃・鄧銅等、及曲長・屯將七十餘人、突將無前・賓叟・青羌・散騎・武騎一千餘人、此皆數十年之內、所糾合四方之精銳、非一州之所有。若復數年則損三分之二。當何以圖敵。此臣之末解五也。今民窮兵疲、而事不可息、事不可息、則駐與行、勞費正等、而不及蚤圖之。欲以一州之地、與賊持久。此臣之末解六也。夫難平者事也。昔先帝敗軍於楚。當是時、曹操拊手謂天下已定。然後先帝連吳・越、西取巴・蜀、舉兵北征、夏侯授首。此操之失計、而漢事將成也。然後吳更違盟、關羽毀敗、秭歸蹉跌、曹丕稱帝。凡事如是、難可逆料。鞠躬盡力、死而後已、至於成敗利鈍、非臣之明所能逆覩也。

（後出師表）

此篇は孔明の文集並に三國志本傳に見ゆる所なく、張儼の默記に出でたるを本とするものゝ如し。漢晋春秋にも之を掲げたり。さればにや、後人之を僞作にあらずやと疑ふものあり。然れども溫公は既に通鑑中に之を收めたるのみならず、一篇の結末に於て、臣鞠躬盡瘁死して後已まん。成敗利鈍に至りては、臣が明の能く逆じめ覩る所にあらざるなり。といはれたるは孔明の眞面目なり。精神なり。一言にして能く五十年の生涯を說き得たるものなり。之を孔明の作とするに於て疑ふべき所無きに似たり。其の他は之を考證家の研究に讓る。

建興六年十二月、孔明は兵を率ゐて、散關を出で陳倉を圍む。然れども陳倉既に防備ありて克つこと能はず。魏の將曹眞は祁山に志を得ざりし孔明が、再び出づることあらば、必ず陳倉に來らんと豫想して、良將郝昭等をして之を守らしめたるなりき。昭頗る武略あり。孔明之を攻むること急なるも屈せざりしかば、昭が同鄉の人靳詳をして、城外に於て遙に郝昭に說かしむ。

昭、樓上よりして答へて曰く『魏家の科法は卿の習ふ所、我の人と爲りは卿の知る所。我れ國恩を受くること多し。而して門戶重し。卿に言ふべきものなし。唯必死あるのみ。卿還りて諸葛に謝せよ。便ち攻む可きなり』と。

孔明重ねて、詳をして郝昭に說かしむ。曰く『兵相敵せず。空しく自ら破滅せんのみ』と。

昭曰く『前言既に定まれり。我れ卿を知るのみ。箭は卿を識らざるなり』と。遂に聽かず。淋漓たる意氣また大に稱すべきなり。

孔明は餘儀なく自ら數萬の兵を督して之を攻む。昭が兵は纔に千餘人なり。蜀軍雲梯を起して城に臨めば、城中よりは火箭を發して之を射る。梯上の人燒死するもの多し。蜀軍又井闌（木を以て交構し井闌の狀の如くす）百尺を作りて以て城中を射、土丸を以て塹を塡め直に城に攀ぢんと欲す。城中にては內に重牆を造りて之を防ぐ。蜀軍更に地突（地道なり）を造りて城內に入らんとすれば、城中にては地を穿ちて之を橫截し、晝夜相戰ふこと二十餘日なり。

魏の明帝は張郃を方城に召して、蜀を討たしむ。酒を置き郃を送りて曰く『將軍の到る頃、亮既に陳倉を得ることなきか』と。郃は孔明が深く入りて糧に乏しきを知る。故に指を屈して計りて曰く『臣到る比亮は既に走らん』晝夜を兼ねて兵を進めたるに、未だ至らず。果して孔明は食盡きて退きぬ。魏の將王雙之を追ふ、孔明は擊つて雙を斬り兵を班へしたり。

翌建興七年の春、孔明は部將陳式を遣はして、武都陰平を攻めしむ。魏の將郭淮衆を率ゐ來りて式を擊たんとせしが、孔明自ら出でて建威に至るに及び郭淮退き走れり。孔明遂に二郡を平らげて還る。後皇帝詔して曰く

街亭の役、答馬謖に在り。而かも君、愆を引きて深く自ら貶抑す。君が意に違ふを重んじ、守る所を聽順せり。前年師を燿かして王雙を斬り、今歲茲に征して郭淮遁れ走る。氐羌を降集して二郡を興復し、威兇暴を鎭めて功勳顯然たり。方今天下騷擾し、元惡未だ梟せず。君大任を受けて國の重を幹る。而して久しく自ら抑損するは、洪烈を光揚する所以にあらず。今、君を丞相に復す。君其れ辭すること勿れ。

聖旨の優渥なる、孔明固より辭すべきにあらざるも、三度兵を出して未だ大功あるなく、長安にだも入ること能はずして此の優詔を賜はる。誠忠なる孔明の心中、果して苦悶なきを得るや否や。

此の年夏四月、吳の孫權も帝號を稱し、使を遣はして來り告ぐ、蜀の諸臣皆曰く

『之に交るも益なくして、而して名體順ならず。宜しく正義を顯明して、其盟好を絶つべし』と。

孔明曰く『權や僭逆の心あること久し。而して之を怨する所以のものは犄角の援を求むればなり。今若し顯絶を加へなば、我を讎とすること必ず深からん。さらば兵を移して東を戍り、之と角力して其土を幷するを須ち初めて中原を議せざるべからず。彼れ賢才尙ほ多く將相輯睦す。未だ一朝にして定むべからざるなり。兵を屯して相持し、坐らにして老を須ち北賊をして計を得せしむるは算の上なるものにあらざるなり。昔し孝文(漢の文帝)辭を卑くして匈奴と通好し先帝また優に吳と盟ふ。皆權に應じ變に通じて弘く遠益を思ふ。匹夫の分を爲すものにあらざるなり。今議者みな思へらく、權が利は鼎足に在りて力を併すること能はず。且つ志望滿ちて岸に上るの情(江北に出ること)なしと。此を推すに皆是に似て而して非なり。何となれば其の智力侔しからず。故に江を限りて自ら保つ。權が江を越ゆる能はざるは猶ほ魏賊の漢を渡ること能はざるが如し。力餘りありて利取らざるにあらず。若し大軍にして討たば、彼れ上は當に其の地を分裂して以て後規を爲すべく、下は當に民を略し境を廣くし、武を內に示すべし。端坐するものにあらざるなり。若し其動かざるに就きて之を我に睦じくせば我の北伐する東顧の憂なく河南の衆盡く西するを得ず。これの利たること亦已に深し。僭位の罪、未だ明らかにすべからざるなり』と。乃ち衞尉陳震を遣はして、權の正號を慶することゝなしぬ。

草廬對策の言を記憶するものは、又必ず其の大方針を了するなるべし。曾て關羽襲殺に隙を開き、次で秭歸の敗戰ありて怨を重ねしが、孔明は猶ほ忍びて吳と好を通じたり。羽の讎を報ゆるを欲せざるにあらず。玄德地下の怨を慰むるを望まざるにあらず。しかも猶ほ此の情を棄てゝ吳と通好する所以のものは、漢室興復の大義に於て動すべからざる大方針の存するものあればなり。且つ孔明の初めて祁山に出づるや、吳も亦兵を興して魏を攻めたりき。然るを今尊號の一事によりて舊來の方針を變じ、目下の交情を破るべきか。否、何人も孔明の處置に就きて首肯する所あるべきなり。

(四) 孔明大に仲達を破る

二年にして兵を出すこと三度、未だ功を收むること能はざるを以て、孔明は更に兵を練り糧を積み、漢城を沔陽に築き樂城を成固に築きて徐ろに後日の計を爲せしに建興八年の初秋、魏の將曹眞、兵を率ゐて蜀を攻む。孔明は成固、赤坂に屯して防備を嚴にせしが、たま〳〵大雨三十餘日、棧道斷絶せしかば、曹眞は戰はずして退きたり。

翌建興九年春、孔明は李平(嚴名)を漢中に留めて府事を署せしめ、自ら軍に將として、出でゝ祁山を圍む。木牛を以て兵糧を運びたり。

魏の明帝、司馬仲達に詔して曰く『西方の事重大なり。君にあらざれば不可なり』と。乃ち將軍張郃、費曜、戴陵、郭淮等を督して孔明を防がしむることゝなしぬ。

孔明は一軍を留めて祁山を攻め、自ら仲達を上邽に逆ふ。先づ郭淮、費曜と戰つて之を破り、大に其の麥を刈り、更に仲達と上邽の東に相遇ふ。仲達、軍を收めて險に據り、敢て戰はず。孔明引き還る。仲達また之を尾して鹵城に至る。張郃曰く『彼れ遠く來りて我を逆ふ。戰を請へども得ず。思に我が利は戰はざるに在り。長計を以て之を制せんと欲するなり。且つ祁山(守將の名魏平)は、大軍の近くに在るを知りて人情自ら固かるべし。宜しく此處に止まり奇兵を出して其背後に出づるを示すべし。進前すれば敢て逼らざるべからず。坐ながら民望を失ふなり。今亮は孤軍食少し。亦行き去るべし』と。仲達は張郃が嘗て孔明を拒ぐこと兩度にして、其の名關中に著はれしを忌みてや、其の言を用ゐずして、進みて鹵城に至れるなり。然れども心中深く孔明を畏れて敢て戰はず。山に登り營を建てゝ以て自ら守れり。

賈詡、魏平等數々戰はんことを仲達に請ふ。曰く『公の蜀を恐るゝは虎の如し。天下の笑を奈何せん』と。諸將また仲達の戰ふ能はざるを笑ふ。仲達も丁得に慚づる所ありけん。意を決して戰ふ。先づ張郃をして蜀の無當軍の將何平を南圍に攻めしめ、自ら中軍を率ゐて孔明と相當る。

孔明は魏延、高翔、吳班等をして逆戰せしめ、大に仲達を破り、甲首三千を獲たり。仲達敗兵を收めて其の營を保つ。

仲達は策略縱橫にして、用兵の妙を極めたるものなり。天下皆之を憚る。しかも孔明と相遇ふや、回避することこの如く、已むを得ずして戰へば則ち敗る。彼れ元來蜀軍の糧に乏しきを知る。故に營を守りて曠日彌久以て其の自ら退くを待てり。然るに偶々詡、平等の言あり。爲に兵氣を沮喪せしむるのみならず、己れの武名も亦地に墜ちんとするを畏れ、敢て戰を交へしが、是れ本より彼の本志にあらざるなり。彼れ能く蜀軍の持病を知り、孔明を知り、又能く己れを知る。故に營を守りて失なきを期するは、是れ魏軍に取り萬全の策たりしなり。

夏六月、孔明は糧盡きて退くの已むを得ざるに至れり。是れ仲達の待ちに待ちたる所なり。乃ち張郃をして之を追擊せしむ。郃、追ふて水門に至る。孔明高きに乘じて伏を布き、弓弩亂發し、大に魏軍を破り、張郃を殺して歸れり。郃は魏の良將にして、張遼、徐晃等と名を等しくし、勇武ありて變化に富む。仲達其の計を用ゐず。却て蜀軍を追擊せしめて之を危地に置く。仲達の心中測り知るべからず。清田儋叟の通鑑評語にも『良將歸天』の四字を以て之を悼惜せり。

孔明兵を出す毎に食盡きて還る。所謂蜀道の險、輜重の難言ふべからざるものあり。今年孔明の北出するや、李平留りて運事を督せしが、たまたま霖雨あり て運糧繼かざるを恐れ、參事狐忠、督軍成藩をして、孔明を呼び還さしむ。既に還るに及びて李平は驚きたるものゝ如くにして曰く『軍糧饒足、何を以て歸ることを說かん』と。督軍岑述といふものを殺して以て、己れの責を解かんとしたり。

孔明は平が前後の手筆書疏を出して、之を糺明したるに、平が言ふ所、本末違錯し、終に辭窮し情竭きて具さに其の罪狀を自白したり。是に於て孔明は、平が過惡を表して、官を免じ爵土を削り、之を梓潼郡に徙したり。而して平が子豐をば、中郎將參軍事と爲し、之を戒めて曰く『吾れ君が父子と力を戮せて以て漢室に奬む。謂ふ至心感動して、終始保つべしと。何ぞ中ごろにして乖るを圖らん。若し都護(平)は罪を思ひて意を一にし、君は公琰(蔣琬)と心を推して事に從はゞ、可否また通じ、逝きてまた還るべし。詳に斯の戒を思ひ、吾が心を用ふるを明らかにせよ』と。

孔明また蔣琬等に書を與へて曰く『陳震(孝起)曾て我が爲に語りて曰く、正方(李平の字)は腹中に鱗甲あり。鄉黨以て近づくべからずと爲す。吾れ思へらく鱗甲は

唯之を犯すべからざるのみと。また蘇張のこと有りて、不意に出づるを圖らざりき。陳震をして之を知らしむべし』と。

孔明は曾て馬謖に於て誤り、今又李平に於て失す。而して謖を斬り、平を廢し、謖の遺孤を撫し、平の子を戒しむ。嚴然として法を持するの意、溫乎として人を愛するの情、一時に流露して、能く人をして感泣せしむるものあり。殊に己れの過を公表して、人の善を揚げ深く自ら責めて聊かも修飾を加へざる。其の品性の美にして高き誠に仰ぎ見るべきなり。

第十五章　五丈原

(一)　孔明渭濱に屯田す

天下に敵なき將略を有して孔明の數々退く所以のものは輜重困難にして糧食常に乏しければなり。よりて三年の間、士民を休め農を奬め、兵を練り、木牛流馬を造りて米を斜谷口に運び、以て大事を決すべき時機の至るを待てり。

建興十二年二月、孔明遂に十萬の兵を率ゐて斜谷より出で、又使を吳に遣はし、同時に大擧して魏の南を侵さしむ。是に於てか三國の活劇場は又一大動搖を來すに至れり。

司馬懿（仲達）

孔明、兵を進めて渭水の南に陣せしかば、仲達も亦渭水を渡り、水を背にして壘を營み、以て之を拒ぐ。仲達曰く『亮若し武功に出で、山に依りて東せば誠に憂ふべし。若し西の方五丈原に上らば、諸將無事ならん』と。幾許もなくして孔明は五丈原に屯したり。然れども仲達は猶ほ逡巡して敢て戰はざりしかば、孔明は兵を分ちて屯田し、以て久駐の策を爲せり。蜀の兵にして耕すものは、渭濱の民と相雜はり

て、しかも一點の私なく、軍令明肅なりしかば、百姓皆安堵せり。

孔明五丈原に陣せしを以て、人或は其の將略を疑ひ、却て仲達の明を稱するものあり。今、五丈原の地を察するに高くして平らかに、且つ廣くして大兵を屯するに適す。退きて守る時は敵攻むべからず。進みて戰ふ時は敵守るべからざるなり。眞に是れ兵を駐むべき好箇の地にあらずや。故に蜀兵の分れて屯田するも、仲達は一指をつくること能はざりしなり。胡致堂曰く、

司馬懿の言は譎なり。實は孔明が五丈原に屯するを恐れ、又逆擊を憚る故に此の語を爲して以て其の下を安んずるのみと。

此の言當れりといふべし。

孔明屯田し、仲達敢て戰はず。此の間暫らく眼を魏吳の境に轉せしめよ。

(二) 魏吳の勝敗

建興九年に溯りて、以後同十二年に至るまで、凡そ四年間に於ける、兩國の關係を察するに年々戰ひありて、而かも著るしき勝敗なし。九年には吳將孫布といふもの伴りて魏に降り、揚州刺史王凌を誘ふ。王凌之を信じ步騎七百を遣りて之を迎へしめたるに、孫布掩擊して之を破れり。此の如きは戰ひ克つと雖も、却て吳の威望を損するものあり。史家之を評して、

孫權自ら其の國の力、以て魏を斃すに足らざるを量り、時に疆場の間に於て、詐を設け奇を用ゐ、以て敵人の來るを誘ひて之を陷るゝに過ぎざるのみ。孔明が眞に蜀を以て天下を爭はんとするが如き心あるにあらざるなり。

と。吳人の小策笑ふべきなり。同十年には陸遜兵に將としと北出し、廬江を攻めしが利あらずして歸り、同十一年には、孫權自ら出でゝ、新城を攻めんとせしが、僅に岸に上りて忽ち魏の伏兵(遇に)ひ、敗れて退きぬ。同十二年には蜀と相通じて兵を擧げ、孫權自ら將として進んで合肥新城(守將滿寵が新築せし城)に向ふ。兵數、十萬と號す。陸遜諸葛瑾は別に兵一萬を率ゐて、江夏沔口に入り、襄陽に向ふ。魏の將滿寵一旦新城を捨てゝ吳軍を壽春に誘致せんと請ふ。明帝曰く『昔し漢光武兵を遣はし略陽に據りて、終に隗囂を破れり。先帝東に合肥を置き、南は襄陽を守り、西は祁山を固む。賊來るも即ち三城の下に破るゝは、地に必ず爭

ふ所あるを以てなり。たとひ權、新城を攻むるも、必ず拔く能はざるべし。諸將に命じて堅守せしめ、吾れ自ら、往きて之を征せんとす。至る頃權恐らくは走らん』と。乃ち先づ秦朗に兵二萬を授け、司馬仲達を助けて、孔明を防がしめ、仲達に勅して曰く、

たゞ壁を堅くして拒守し、以て其の鋒を挫け、彼れ進んで志を得る能はず。退きて與に戰ふべきものなし。久しく停まれば即ち糧盡く。虜略獲る所無ければ則ち必ず走らん。走りて之を追ふは全勝の道なり。

と。斯くして明帝は自ら龍船に乘じて南下し、孫權を擊たんとす。

明帝未だ至らざるに、魏の將滿寵は壯士を募りて吳の攻具を燒き、且つ孫權の弟の子泰を射殺したり。始め孫權は明帝來ること能はざるべしと豫想せしに、今や帝の大軍の逼り來らんとするを聞き、大に恐れて遁れ歸れり。陸遜諸葛瑾も亦兵を收めて退きぬ。嗚呼、權は誠に守成の主なり。江東を守るの謀あるも、中原に衡を爭ふの意氣なきなり。彼の陸遜の如きも一局部の將器たるに過ぎざるか。彼が胸中に經綸の隻影をだに認むること能はず。惜むべきなり。

孔明が忍びて吳と好を保ちし所以のものは、彼をして魏の南を伐たしめんが爲のみ。伐てば戰はずして走ること此の如し。吳人は遂に魏の敵にあらず。今は小者と、大者と各獨力を以て爭はざるべからず。

(三) 秋風大星落つ

孔明は仲達と相持すること百餘日、數〻戰を挑むも仲達敢て應せざりしかば、巾幗婦人の服を贈りて以て之を辱しめたり。諸將皆憤慨して戰はんとす。仲達亦怒れるものゝ如く、上表して戰を請ふ。明帝、表を得て辛毗を遣はし、節を杖ついて軍師たらしめ、以て戰を制せり。

姜維此の事を聞きて曰く『辛佐治(毗)節を杖ついて到る。賊また出でじ』と。

孔明曰く『彼れ固より戰ふの情なし。固く戰を請ふ所以のものは、武を示すのみ。夫れ將たるもの軍に在りては、君命も受けざる所あり。苟も能く吾を制せば、豈に千里戰を請はんや』と。

老猾仲達、戰へば則ち敗るゝを知る。而かも强ひて戰を請ふ所以のものは、武

を示さんとするのみ。故に明帝亦其の情を知り、辛毗を遣りて之を制したるなり。銳才姜維の如きも猶ほ殆んど欺かれんとす。

孔明使者を遣はして仲達の營に至ることあり。仲達兵事を問はずして、殊更に孔明の寢食を問ふ。使者曰く『諸葛公夙に起き夜る寢ねて、罰二十以上、みな自ら之を覽る。食ふ所數升に至らず』と。使者還りて後、仲達、人に語りて曰く、諸葛孔明食少くし事煩はし。其れ能く久しからんや』と。

清田儋叟之を評して『老魅有識』といはれたり。眞に彼が才識亦非凡なるものありといふべし。天下彼の畏憚すべきものは、獨り孔明あるのみ。孔明にして死するあらば、彼は三國の世に獨歩すべきなり。其の寢食を問ふて之を覘ふ。兵馬のことは、孔明の健康に附隨して決すべき問題なり。

果せるかな孔明病を得たり。嗚呼天は漢室に幸ひせざるか。病勢日日に募る。蜀漢の朝廷大に之を憂ひ、李福といへるものを遣はして病を省し、且つ國家の大事を諮らしむ。

李福來り、孔明と語りて別れ去りしが、數日にして又還り來れり。孔明曰く『我れ君が還る意を知れり。近日、言語日にわたると雖も、盡さゞる所あり。更に來りて決を求むるのみ。公が問ふ所のものは、公琰(蔣琬)を可なりとす』と。

李福曰く『前には諮請を盡さゞる所あり。若し公が百年の後、誰か大事に任ずべきものぞ。故に還り來れるのみ。乞ふ又蔣琬の後を聽かん』

孔明曰く『文偉(費禕)を以て之に繼ぐべし』

李福また其の後を問ふ。孔明終に答へざりき。

蘇老泉が管仲論の末尾に曰く、

蕭何死せんとして曹參を擧げ以て自ら代る。大臣の心を用ふること、固に此の如くなるべきなり。一國は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。賢者は其の身の死を悲しまずして、其の國の衰ふるを憂ふ。故に必ずまた賢者ありて、而して後に死あり云々。

顧みれば蕭何の死せるは、惠帝の二年に在り。既に强敵項羽を倒したり。漢室の帝業を大成したり。死の岸頭に立つも自ら安かるべし。孔明は蔣、費の二賢を擧げ、相次で己れに代はらしむと雖も、獨漢百年の後を思はゞ、恐らくは暗涙の

禁じ得ざるものありしなるべし。死や固より悲しむべし。國家の前途は更に大に悲しむべきなり。未だ先帝の遺託を遂げず。出廬以來の責任を完ふすること能はざるに、死は猶豫なく刹那に逼るあり。偏僻なる蜀土、基礎猶ほ薄弱なる漢廷、人材缺乏せる國家、闇弱なる後皇帝を後にして逝かざるべからず。『一國は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。』蜀漢當時の形勢は最も善く此の言に適合したるものなり。此の際に於ける孔明の心事を推想するもの、誰か卷を掩ふて泣かざるあらんや。

建興十二年八月、秋風落寞として、五丈原頭大星の隕つるあり。孔明五十四歳にして陣中に逝けり。

清田儋叟曰く、

大龍海に入る。天地慘澹として日月光なく、鬼は陰に哭し、人は陽に泣く。（鑑評語）

僅に五十を超ゆること四つ。古稀に十六年を餘して倒る。心身過勞の結果なり。『鞠躬盡瘁死して後已む』。是れ固より孔明の本志なりと雖も、渭濱の秋風綿々たる恨を吹いて盡きず、山川草木皆聲を作す。漢室の運命は、茲に其の衰亡を宣言せられたり。

揚儀、姜維等血涙を抑へて、孔明の遺骸を奉じ、軍を斂めて退く。百姓走りて仲達に告ぐるものあり。仲達喜びて之を追ふ。揚儀旗を反へし鼓を鳴らして、仲達に向はんとするものゝ如くす。仲達疑ふて敢て逼らず。揚儀等遂に陣を整へて去り、斜谷に入りて喪を發せり。百姓爲に語りて曰く『死せる諸葛、生ける仲達を走らす』と。仲達笑ふて曰く『吾れ能く生を料るも、死を料る能はざるが故なり』と。又孔明の營壘を案行し、嘆じて曰く『天下の奇才なり』と。

山陽の詩に、

死諸葛。生仲達。　吾能料生不料死
此語大癡乃小黠。　卻有天下奇才目
足見姦雄心眞服　壽曰管蕭流。
甫曰伊呂儔。　後儒贊頌雷同耳。
不若公論出敵讎。（題司馬仲達觀武侯營趾圖）

蜀の將魏延、武勇人に過ぎ、數々奇策を出す。されど孔明常に之を用ゐざりしかば、魏延以て怯と爲し、己れが才用の盡さゞるを恨めり。孫權曾て費禕に語りて曰く『揚儀、魏延は小人なり。若し一朝諸葛亮なきに至らば、必ず禍亂を爲さん』と。孔明亦能く之を知れり。然れども其の才を惜しみて暫らく其の心を問はざりき。病篤きに及びて揚儀、費禕、姜維等と身後の計を盡し、以て魏延に備へたり。孔明薨じて未だ喪を發せず。揚儀先づ費禕をして往きて、延が心を揣らしむ。延曰く『丞相亡ぶと雖も、吾の在るあり。府親官屬は即ち喪を奉じて還り葬るべし。吾れ當に自ら諸軍を率ゐて賊を擊つべし。何ぞ一人の死を以て天下のことを廢せんや。且つ魏延たるもの、何ぞ揚儀の指揮の下に立たんや』と。乃ち費禕と共に行留處分を爲し、延と禕と連名して命を諸將に下さんとす。

禕延を欺きて曰く『君が爲に還りて揚長史(儀)を說かん。長史は文吏にして軍事に關すること稀れなり。必ず命に違はじ』と。禕出でて馬を走らして去る。既にして、延之を悔ゆるも及ばず。よりて人をして揚儀等の擧動を覘はしむるに、諸營相次で軍を引きて還らんとす。魏延大に怒り、所領を率ゐて先づ發し、過ぐる所、閣道を燒絕す。是に於て延と儀と各〻其の反逆を上表す。一日の中羽檄交〻至る。後皇帝之を董允蔣琬等に問ふ。允と琬とは共に儀を信じて延を疑へり。

揚儀は魏延の爲に一歩を先んぜられたるも、樹木を斫つて道を通じ、晝夜兼行す。延先づ南谷口に據り、兵を遣はして儀を逆擊せしむ。儀等、將軍何平をして敵を拒がしめけるに、平敵軍を叱咤して曰く『諸葛公去りて、其身未だ冷やかならざるに、汝等何ぞ此の如くなる』と。延が兵は曲の己れに在るを知りて皆散じたり。魏延敗北し、其

丞相祠堂及び琴亭

の子數人と漢中に走りしが、揚儀は馬岱を遣はし、追ふて之を斬り、延が三族を夷らげたり。斯くて全軍成都に還るを得たり。

孔明遺命して漢中の定軍山に葬らしむ。後皇帝痛惜措く能はず。爲に天下に大赦し、詔を下して丞相武鄉侯の印綬を賜はり、謚して忠武侯と爲せり。詔に曰く、

惟君體資文武、明叡篤誠、受遺託孤、匡輔朕躬、機絕興微、志存靖亂、爰整六師、無歲不征、神武赫然、威鎭八荒、將建殊功於季漢、參伊周之巨勳、如何不弔、事臨垂克、遘疾隕喪、朕用傷悼、肝心若裂、夫崇德序功、紀行命謚、所以光昭將來、刊載不朽、今使使持節左中郎將杜瓊、贈君丞相武鄉侯印綬、謚君爲忠武侯、魂而有靈、嘉茲寵榮、嗚呼哀哉、嗚呼哀哉。

大厦を支へたる一木、茲に倒れたり。後皇帝が傷悼堪ゆべからざるの情、誠に想ひ見るべきなり。曾て孔明の上表中にいへることあり。曰く、

成都に桑八百株、薄田十五頃あり。子弟の衣食自ら餘饒あるべし。臣に至りては外任にあり。別に調度なく、身に從ふ衣服悉く官に仰ぐ。別に生を治めて尺寸を長せず。若し臣死するの日に於ても、內に餘帛、外に贏財を有して以て陛下に負むくことあらしめじ』と。

死するに及びて果して其の言の如くなり。桑八百株と薄田十五頃とは子孫の衣食の料たるのみ。他に餘財あるなし。加之、孔明が平常自ら處するに極端なる儉素を以てし、普通人の堪ゆべからざる所を堪へたり。而かも己れの財產に於て更に加ふる所なかりしは、之を國家の事業に投じたるか、或は窮者を救ひたるか。必ず此等の美擧の爲めに費やされたるを知るべきなり。清廉己れを持し、誠忠君に奉じて終始渝らず。彼の君に仕へて佞媚を事とする徒の、私財を貯ふるとに汲々として、忽ち數百萬の財產を有し、大厦高樓を營み、競つて豪奢を事とし、得々然として歲月を空費し、國家の憂を憂へず、私人の樂をのみ樂むもの、愈々多からんとするは、是れ邦國の爲め慶事にあらざるなり。

孔明死して君の之を悼むこと深し。而して民の之を悲み之を追慕すること、更に深きものあり。所在其の廟を建てゝ之を祭らんことを請ひしも、後皇帝之を許さゞりしかば、己むを得ずして時により私に之を祭れり。依りて習隆、尙充

等上書して曰く、

臣聞く、周人は召伯の德を懷ふて甘棠を伐らず。越王は范蠡の功を思ひ、金を鑄て以て其の像を存す。漢興りてより以來、小善小德にして、形を圖し廟を立つるもの多し。況んや亮が德は遐邇に範り、勳は季世を蓋ひ、王室を興して壞れざるは、實にこの人に賴る。しかも蒸嘗私門に止まり、廟像闕けて立つことなし。百姓をして巷祭し、戎夷をして野祀せしむ。これ德を存し、功を念ひ、往昔を追懷する所以にあらず』と。

後皇帝、此の言を納れ、遂に勅を下して孔明の廟を汚陽に立て、以て百姓の私祀を禁じたり。

其の德によりて化育せられたる人民の之を追慕すること、固より深かるべきなり。嘗て孔明に廢せられて、而して猶ほ其の死を悼み、其の人を慕ふの情、更に切なるものあり。初め長水校尉廖立といふものあり。自ら思へらく、己れが才名、宜しく孔明が副たるべしと。然れども職位常に游散なりしかば、怏々として怨謗すること已まず。孔明遂に立を廢して民となし、之を汶山に徙したりき。

孔明卒するに及び、立は涙を垂れて曰く「吾れ遂に左衽せん」と。又彼の李平も孔明の訃を得、病を發して死せり。

習鑿齒曰く

昔し管仲、伯氏の駢邑三百を奪ふ。齒を沒して怨言なし。聖人以て難しと爲す。諸葛亮の廖立をして泪を垂れしめ、李嚴をして死を致さしめたるは、豈にたゞに怨言なきのみならんや。夫れ水は至平にして邪者法を取り、鑑は至明にして醜者怒を忘る。水鑑の能く物を窮めて、怨みなき所以のものは、其の私無きを以てなり。水鑑私無し。猶ほ以て謗を免る。況んや大人君子、生を樂むの心を懷き、矜恕の德を流き、法は用ゐざるべからざるに行ひ、刑は自ら犯せるの罪に加ふ。之を爵して私にあらず。之を誅して怒らず。天下服せざるものあらんや。

夫れ治者の理想は無爲にして化するに在り。然れども社會の漸く複雜なるに及びては、是れ言ふべくして行ふべからず。信賞必罰、一點の私心なく、賞して驕らず、罰して怨みざるは、後世に於ける治者の理想なり。孔明能く之を行ひ得た

り。政治家としての才德、兼ね至れりとすべし。

炎興元年の秋、魏の鎭西將軍鍾會蜀を征して漢川に至り、孔明の廟を祭り、且つ軍士に令して、孔明が墓所の左右に於て芻牧樵採するを得ざらしめたり。孔明は敵中にも猶ほ此の如き崇拜者を有したり。

孔明逝きて後、蔣琬費禕相次で尙書令となり、誠忠己れを忘れて國家に盡すと雖も、支柱は既に倒れたり。吾人また多く言ふを好まず。唯孔明の子孫につき、數言を附加して其の餘烈をとゞめん。

(四) 孔明子孫ありといふべし

初め孔明は子なくして兄瑾の子喬を養ひて嗣子とせしが、後瞻を生む。喬は夙く卒して、瞻父の爵を襲ぐ。建興十二年、孔明、武功より出づる時、兄瑾に書を與へて曰く、

瞻今已に八歲、聰慧愛すべし。其の早成を嫌ふ。恐らくは重器たらざらんのみと。（瞻は建興十二年に八歲とすれば、建興五年、即ち孔明が四十七にして初て北征に上りたる年の出生なり。）

子を見ること親に如かず。瞻が八歲の時、孔明は世を去りたれども既に瞻の將來を道破したり。稚兒の聰慧は可なりと雖も、重器たらんものは、別に之を求めざるべからず。孔明又曾て其の子を誡めて曰く、

夫れ君子の行ひは、靜以て身を修め、儉以て德を養ふ。澹泊にあらざれば、以て志を明らかにする能なく、寧靜にあらざれば、以て遠きを致すなし。夫れ學は須らく靜なるべし。才は須らく學ぶべし。學にあらざれば、以て才を廣むるなく靜にあらざれば、以て學を成すなし。慆慢なれば則ち性を理する能はず。險躁なれば則ち性を理する能はず。年は時と馳せ、意は歲と去る。遂に枯落を成し、悲嘆窮廬、將た又何をかせん。

瞻字は、思遠、年十七にして公主に尙し、騎都尉に任ぜらる。其の明年は翰林中郎將となり、次で射聲校尉、侍中、尙書僕射に遷り、又軍師將軍に拜せらる。

瞻、書畫を工みにし、識念强し。蜀人孔明を追思して瞻が才の敏なるを愛し、朝廷に一善政佳事ある毎に、皆相傳へて曰く『葛侯の爲す所なり』と。而して實は瞻が爲す所にあらず。美名盜譽、其の實に過ぐべきものあり。炎興元年、魏の將鄧

艾蜀を伐ちて陰平より景谷道に由り、直に成都に逼る。瞻、諸軍を督して涪に至り、鄧艾を防ぎしが、前鋒敗れ、退きて綿竹に止まる。艾、書を贈り瞻を誘なひて曰く、

若し降らば、必ず表して瑯琊王とせんと。

瞻怒りて、艾が使者を斬り、遂に大に綿竹に戰ふ。戰ひ敗れ、三十七歳にして陣中に死す。

鄧艾、成都に逼る。瞻の子尚、嘆じて曰く、『父子、國の重恩を荷ひ、早く黄皓(侯主)を斬らずして、以て傾廢を致す。生きて何をかせん。』乃ち馳せて魏軍に趣きて死す。尚の弟を京といふ。後、河内に移りて、諸葛家の系統を續ぎたり。晋に仕へて廣州の刺史となる。

干寶曰く、

瞻は智以て危きを扶くるに足らず。勇以て敵を拒ぐに足らず。然れども外は國に負かず。内は父の志を改めず。忠孝存せり

蜀の傾くや志氣既に萎靡し、節に死するもの多からず。然るに瞻尚、父子は死を輕んじて義を重んじ、忠烈凛々として能く孔明の志を繼ぎたり。其の智勇は未だ大に稱するに足らずと雖も、忠孝存して失はず。亦以て孔明が家法の美なるを見るべきなり。

第十六章　雜事

(一)　孔明の著作

三國志に見えたる諸葛氏集目錄』左の如し。

開府作牧第一　權制第二
南征第三　北出第四
計算第五　訓厲第六
綜覈上第七　綜覈下第八
雜言上第九　雜言下第十
貴和第十一　兵要第十二

傳運第十三　與孫權書第十四
與諸葛瑾書第十五　與孟達書第十六
廢李平第十七　法檢上第十八
法檢下第十九　科令上第二十
科令下第廿一　軍令上第廿二
軍令中第廿三　軍令下第廿四

右廿四篇凡十萬四千一百一十二字

以上列記したるものゝうち、今日に傳はるは殆ど皆無なり。明の錢世堯が輯めたる武侯全集に、

新書
心書

の二篇を收めたるも、是れ亦信ずべきものなるや否や、頗る疑ふべしと爲す。要するに武侯の作として疑ひなきものは前後出師表其の他數種の尺牘類なるべし。武侯集雜著の部に收められたるもの左の如し。

梁父吟　黃陵廟記節文
上事　與張魯
與吳主　與張裔
與兄瑾三篇　誡外甥
遠涉帖　吾心如秤

多くは短文。然れども是れ信ずべきものなるべし。

明の王士騏が編したる武侯全書は、

鼎立　繼統
連吳　南征
北伐　調御
法檢　遺命
遺事　綱目
評論

の十一篇に分たれて、武侯に關する事實を極力搜索して之を收錄したり。（十一篇は

（錢世堯が武侯集のうちに收めらる）

孔明嘗て八務、七戒、六恐、五懼を作る。皆條章あり。以て臣子を訓厲したる由、史に明記する所なれども、其の文辭傳はらず。

（二）八陣

孔明が用ゐたる八陣法は孔明の創意に出でたるや否や。稍々明らかならざるものなり。李昭玘が八陣論に曰く、

蓋し其の法は黃帝に肇まり、成周に具はり、諸葛孔明に於て變化す。諸葛孔明の獨り能く是を爲すに非るなり云々。

然れば孔明は前賢の遺意を受けて、變化の妙用を工夫したるものなるべし。其の陣法は圖を以て傳はるものあり。未だ眞僞を知るべからず。荆州の魚復縣には、孔明が小石を積んで八陣の模型を留めたりと稱せらるゝ古蹟あり。荆州記に曰く、

魚復縣鹽井より以西、石磧平曠にして四遠を眄望す。諸葛孔明、細石を積んで壘を爲す。方數百步ばかり、壘の西郭、又石を集めて八を行る、庶くは復敗れじ行を爲す。相去る二丈許、之を八陣圖と謂ふ。曰く八陣既に成る。今より師と。自後識見深きもの、並に能く了するなし。桓宣武（溫）蜀を伐ち、之を經て以て常山蛇勢と爲す。

以後之に就きては、劉昉の八陣圖記、范蠡の八陣圖說、揚維禎の八陣圖賦等の文章あり。詩には、

八陣圖　杜甫

功蓋三分國　名成八陣圖
江流石不轉　遺恨失吞吳

八陣磧　蘇東坡

平沙何茫々　髣髴見石蕝
縱橫滿江上　歲々沙水齧
孔明死已久　誰復辨行列
神兵非學到　自古不留訣

至人心已悟　後世徒妄說
自從漢道衰　蜂起盡姦傑
英雄不相下　禍難久連結
驅民市無煙　戰野紅流血
萬人睹一擲　殺盡如沃雪
不爲久遠計　草々常無法
孔明最後起　意欲掃群孽
崎嶇事節制　隱忍久不決
志大遂成迂　歲月去如瞥
六師紛未整　一日英雄折
唯餘八陣圖　千古壯夔峽

此の他蘇轍も亦八陣磧の詩あり。今略す。
又某氏の詩にも（東坡の作なるべし）

八陣功高妙用藏　木牛流馬法俱亡

縱有桓溫恐未詳

後來識得常山勢

といふものあり。八陣の運用變化等の精細に至りては、其の法亡びて傳はらざるものゝ如し。

（三）木牛流馬

孔明は又頗る巧思發明に長せり。損益連弩木牛流馬等は皆其の創意に出でたるものなり。

損益連弩は之を元戎といふ。鐵を以て矢をつくる。矢の長さ八寸、一弩にして十矢ともに發す。

諸葛亮集に木牛流馬を作るの法あり。曰く、

木牛は方腹曲頭一脚にして四足、頭は領中に入り、舌は腹に著く。載すること多くして行くこと少し。宜しく大用すべくして、小使すべからず。特り行くものは數十里、群行するものは、二十里なり。曲れるものを牛頭と爲し、雙ぶものを牛脚と爲す。橫なるものは牛領たり。轉ずるものは、手足となり、覆へる

ものは、牛背となり、方なるものは牛腹となり、垂れたるものは牛舌となり、曲れるものは、牛肋となり、刻めるものは牛齒となり、立てるものは牛角となり、細なるものは牛鞅となり、攝るものは牛鞦となる。牛に軸して雙轅を仰のかす。人行くこと六尺にして、牛行くこと四歩。一歳の糧を載せて、日に行くこと二十里、而して人大に勞せず。

流馬尺寸の數は、肋の長さ三尺五寸、廣さ三寸、厚さ二寸二分、左右同じ、前軸の孔、墨を分ち頭を去ること四寸、徑中二寸、前脚の孔、墨を分つこと二寸、前軸の孔を去ること四寸五分、廣さ一寸、前杠の孔は、前脚の孔を去ること分墨二寸七分、孔の長さ二寸、廣さ一寸、後軸の孔は、前杠を去ること分墨一尺五分。大小前と同じ。後脚の孔は分墨、後軸の孔を去ること三寸五分、大小前と同じ。後杠の孔は後脚の孔を去ること分墨二寸七分。後載剋は、後杠の孔を去ること分墨四寸五分、前杠の長さ一尺八寸、廣さ二寸、厚さ一寸五分、後杠と等板と、方囊二枚、厚さ八分、長さ二尺七寸、高さ一尺六寸五分、廣さ一尺六寸、枚毎に米二斛三斗を受く。從上杠孔は肋下を去ること七寸、前後同じ。上杠の孔は下杠の孔を去ること分墨一尺三寸、孔の長さ一寸五分、廣さ七分、八孔前後の四脚に同じ。廣さ二寸、厚さ一寸五分、形制象鞍の如し。長さ四寸、徑面四寸三分、孔經中三脚、杠の長さ二尺一寸。廣さ一寸五分、厚さ一寸四分。杠を同じうするのみ。

雲貴の人々の言ひ傳ふる所によれば諸葛公、隆中に居りし時、客の至るあれば、妻黃氏（承彥の女）之に麵を具ふ。公は其の速かなるを怪み、潛に之を窺ひ見るに、數木人の麥を斫りて運磨すること飛ぶが如きものあり。遂に其の妻に請ふて是の術を傳へ、後其の制を變じて木牛流馬と爲す云々。

黃承彥が曾て『我に醜女あり。黃頭にして黑色而かも才は君と相配するに足れり』といひて、孔明に嫁せしめたる醜顏の才女は、歷史の表面に何等の顯著なる事蹟なきも、能く家事を整理して內顧の思なからしめ、能く其の子を敎養し忠孝の大義を失はず。一代の賢婦人たりしこと疑ひなかるべし。然れども其の工夫に成れる木人が、木牛流馬の原型となりたるや否やは未だ俄に決定すべからざるなり。

木牛流馬の製作方法は上に述べたる如く、精細に傳へらるゝも、此寸法に據り

て、果して造り得るや否や。是れ亦疑ふべきなり。前掲の詩に『木牛流馬法俱亡』の句あるを見れば、其の秘傳は既に〳〵失はれたるものなるべし。或人曰く『孔明の所謂木牛流馬は一輪車なりしものゝ如し』と。是れ頗る奇拔の觀察なるも、猶ほ詳細に、其の理由を聞かざれば玆に斷定を下す能はず。

(四) 遺事の雜記

諸葛瑾弟亮、從弟誕並に盛名あり。三國に分れて仕官す。時人語を爲して曰く『蜀は其の龍を得。吳は其の虎を得。魏は其の狗を得たり』と。

玄德、曾て諸葛亮をして京に至らしむ。因りて秣陵南京の山阜を見る。乃ち嘆じて曰く『鍾山は龍盤、石頭は虎踞、帝王の都なり』と。

孔明、渭濱に於て仲達と戰はんとす。仲達は戎服して事に臨み、人をして密かに孔明を覘はしむ。孔明は乃ち素車に乘り、葛巾にして白羽扇を持し、三軍を指揮す。仲達聞きて歎じて曰く『諸葛君は名士と謂ふべし』

諸葛公嘗て刀を鑄んと欲して未だ得ず。たま〳〵蒲元といふもの西曹椽たり。性巧思多し。因りて之に委ぬ。斜谷に於て金を鎔し器を造るに、特に常法に異れり。刀成りて自ら曰く『漢水は鈍弱にして淬用に任せず。蜀江は爽烈、是を大金の元精と謂ふ。天其の野を分つ』と。乃ち人をして成都より江水を取り來らしむ。

水來りて蒲元刀を淬す。既にして曰く『是れ涪水を雜へたるが故に用ふべからず』と。水を取るもの抗言して敢て雜へずといふ。蒲元、刀を以て水を畫して曰く『雜ゆること八升なり。何が故に雜へずといふや』

水を取るもの叩頭して曰く『實は涪水を渡る時、水を覆へし、遂に涪水八升を加へて之を補へり』と。聞く人驚歎せざるなし。

刀成るや竹筒中に鐵珠を滿たし、之を切るに、手に應じて虛落すること、水を薤ぎ草を刈るが如し。當世の逸品と稱す。因りて神刀と號す。今の屈耳環は、是

れ其の遺範なり。

東普の桓温、蜀を征したる時、猶ほ武侯時代の小吏にして年百歳餘なるものを見たり。温問ふて曰く『諸葛丞相は今誰と比すべきか』意頗る自ら傲れり。老翁答へて曰く『葛公在りし時、亦異なるを覺えざりしが、公歿して後は其の比を見ず』と。

武崗に一幕官あり。渠を鑿つことに因りて一瓦枕を得たり。之を枕すれば、其の中に鳴鼓起るを聞く。一更より擂ちて五更に至る。鼓聲次第に更轉して差はず。既にして鷄鳴を聞く、亦三唱にして曉なり。暮に至るも亦然り。其の人以て怪となし、之を碎きて其の中を見るに、機局を設けて以て夜氣に應ずるの工みあり。乃ち武侯が鷄鳴枕なり。

諸葛公が止むる所の兵士獨り蔓菁を種ゑて六つの利ありと爲す。三蜀江陵の人、今も蔓菁を呼びて諸葛菜といふ。

成都、昭烈帝の廟側に武侯祠あり。祠前に栢樹喬柯あり。老木天に蟠まる。杜甫之を歌ひ段文昌また文を作りて之を記せり。唐末に至りて漸く枯れ、五代のうちは復生せず。宋の乾德五年夏五月、枯柯再生す。時人之を奇とす。

杜甫の詩に曰く、

孔明廟前有老栢　柯如青桐根如石
霜皮溜雨四十圍　黛色參天二千尺
君臣已與時際會　樹木猶爲人愛惜
雲來氣接巫峽長　月出寒通雪山白
憶昨路遶錦亭東　先主武侯同閟宮
崔嵬枝幹郊原古　窈窕丹青戶牖空
落々盤踞雖得地　冥々孤高多烈風
扶持自是神明力　正直元因造化功

大厦如傾要梁棟　萬牛廻首丘山重
不露文章勢已驚　未辭剪伐誰能送
苦心豈免容螻蟻　香葉終經宿鸞鳳
志士幽人莫怨嗟　古來材大難爲用

杜甫又歌つて曰く

丞相祠堂何處尋　錦官城外柏森々
映堦碧草自春色　隔葉黃鸝空好音
三顧頻煩天下計　兩朝開濟老臣心
出師未捷身先死　長使英雄淚滿襟

劍門關は劍州の北境に在り。大劍山は此に至りて兩壁削聳し、路を隘束するあり。武侯こゝに劍門を立つ。姜維が退き守りて以て魏の鍾會を拒ぎたるは是なり。

五丈原は郿縣の西三十里に在り。諸葛公兵を此に屯す。落星村あり。即ち長星の營に墜つる所、上に諸葛祠あり。祁山は西和縣の北七里に在り。山上に城あり。

斜谷關は郿縣の西南三十里に在り。谷の南口を褒といひ、北口を斜といふ。定軍山は沔縣の東南十里に在り、兩峰對峙す。漢昭烈此の山下に營を作り、魏の夏侯淵を斬る。山に諸葛巖あり。上に兵書匣あり。其の山壁立萬仞、人登るべからず。其の下に八陣圖あり。又督軍壇あり。鄉人の言によれば陰雨の時は、山上に擊鼓の聲ありとぞ。

(五) 蔣琬

諸葛公近きて後蔣琬費禕姜維相次で將相の任に當り、公の死後二十有九年、蜀土を保ちたり。

蔣琬字は公琰、零陵湘鄉の人なり。方整にして威重あり。昭烈に隨つて蜀に入る。孔明曰く『蔣琬は社稷の器、百里の才にあらず』と。又曰く『公琰志を忠雅に託す。我と共に王業を贊くべし』と。又密に後皇帝に表して曰く『臣若し不幸あらば、後事は宜しく以て琬に付すべし』と。孔明の之を重んじたること知るべきなり。

孔明の殂するや、琬尚書令となり、尋で大將軍錄尚書事に遷る。時に蜀漢は元帥を失ひて、上下危懼せしが、琬は戚容なく、喜色なく、神守舉止平日の如くなりしかば、衆望漸く服したり。

東曹椽楊戲といふもの、素性簡略なり。琬と談論するや、時々應答せざることあり。或人之を琬に讒して曰く『公の戲と語るや、間々應答せざることあり。戲の傲慢また甚だしからずや』と。琬曰く『人心の同じからざるは其の面の如し。面從後言は古人の誡むる所なり。戲、吾が是を贊せんと欲すれば、其の本心に非ず。吾が言に反せんと欲すれば則ち吾の非を顯はす。是を以て戲默然たり。是れ戲の快なり』と。

督農楊敏といふもの曾て琬を毀りて曰く『事を作すこと慣々、誠前人に及ばず』と。或人之を琬に告げて、楊敏の罪を治せんと請ふ。琬曰く『吾れ實に前人に如かず。何ぞ彼が罪を治せん』と。後楊敏事によりて獄に繫がる。人皆其の必死を懼る。然れども琬が心は洒々落々たり。楊敏罪を免るゝを得たり。其の好惡道を存する皆此の類なり。

琬は孔明が遂に功を收むること能はざりしに鑑み、漢水汚水に由り、東下して魏を襲はんと企てしが、果さずして卒したり。（延熙八年孔明歿後十一年なり）

（六）費禕

費禕、字は文偉、江夏鄳の人なり。族父伯仁に從つて蜀に入る。昭烈、蜀を定むるに及びて之に仕ふ。曾て命を奉じて吳に使したることあり。孫權大に禕を重んじて曰く『君は天下の淑德なり。必ず當に蜀朝に股肱たるべし。恐らくは數〻來ること能はざるべし』と。仍りて常に執る所の寶刀を取りて之を禕に與へたり。

魏延、楊儀の相爭ふや、褘常に之を調停して、各〻其の用を盡さしむ。孔明の卒するや褘、後軍師となり、更に蔣琬に代はりて尚書令となる。其の國に當る功名殆ど琬と比すべし。延熙十六年、歳首の會に歡飲沈醉して、魏の降人郭循の爲に殺されたり。

(七) 姜維

姜維、字は伯約、天水冀の人なり。建興六年、孔明が北伐して祁山に出でし時、維始めて之に事へたり。孔明常に深く其の膽智を愛したり。

孔明卒して後は、維常に北伐軍の將となり、數〻魏と戰ふ。魏には名將鄧艾のあるありて、遂に功を爲すこと能はざりき。既にして魏の將鍾會、鄧艾の蜀を伐つや、維は退ぞきて劍閣を守り、會を防ぎて之を扼止す。然れども鄧艾成都に入りて後皇帝を降したるを以て、維は進退に窮し遂に伴りて會に降り、之を煽動して亂を爲さしめ、機を見て漢室を興復せんことを計りしが、事成らずして會も維も共に魏兵の爲に殺されたり。維死するや膽を割きて之を見るに、大さ斗の如くなりしといふ。

蜀の名士郤正、姜維を論じて曰く、

姜伯約は上將の重きに據り、群臣の右に處り、宅舍弊薄にして資財餘りあるなし。側室妾媵の褻れなく、後庭聲樂の娛みなし。衣服は供するを取り、輿馬は備ふるを取る。飲食節制、奢ならず、約ならず、官給の費用、手に隨つて消盡す。其の然る所以のものを察するに、以て貪を激し、濁を厲まし、情を抑へて自ら割くに非ず。直に謂ふ如是にして足れりと爲す。多く求むるに在らず。凡そ人の談、常に成を擧げて敗を毀り、高きを扶けて下れるを抑ゆ。人は皆姜維が投厝に所なく、身死し宗滅するを以て、貶削して、復料擿せず。春秋褒貶の義に異れり。姜維の學を樂んで倦まず、清素節約の如きは、自ら一時の儀表なり。人或は姜維が數〻兵を出して功なく、却て國力を消耗し、遂に蜀漢の滅亡を來したるを難ずるものあり(陳壽も亦然り)。然れども蜀は國力最も薄弱なるものにして、唯孔明の力によりて支へられたり。孔明死して先づ亡ぶべきは當然の理なりとす。兵を出すも亡び、兵を出さゞるも亦亡ぶ。姜維數〻北伐の兵を出したるは、

固より敵を敗らんが爲めなれども、其實寧ろ自ら守らん爲に有功なる行動なりき。國力消耗を以て之を責むるは誤れりといふべし。

第十七章　諸家の評論

諸葛孔明に關して言はんと欲する所は、既に概ね之をいへり。故に今は諸家の論評二三を列記して更に數言を附加せんとす。陳壽曰く、

諸葛亮の相國たるや、百姓を撫し、儀軌を示し、官職を約し、權勢に從ひ、誠心を開き公道を布き、忠を盡し、時を益するものは、讎と雖も必ず賞し、法を犯し、怠慢なるものは、親と雖も必ず罰す。罰に服し、情を輸すものは、重しと雖も必ず釋し、游辭巧飾するものは輕しと雖も必ず戮す。善は微にして賞せざるなく、惡は纖にして貶せざるなし。庶事精練にして、物其の本を理め、名に循ひて實を責め虛僞齒ひせず。終に邦域のうちに於て、咸畏れて之を愛す。刑政峻なりと雖も而かも怨むものなし。其の心を用ふること平らかにして、勸戒明らかなるを以てなり。治を識るの良材、管蕭の亞匹といふべし。然れども連年兵を動して未だ功を爲す能はず。蓋し變に應ずるの將略は、其の長ずる所にあらざるか云々。

又曰く

然れども亮が才は、戎を治むるに於て長と爲す。奇謀を短と爲す。民を理むるの幹は、將略よりも優れり。而して與に對敵する所、或は人傑に遇ふ。加ふるに衆侔しからず。攻守體を異にす。故に連年衆を動すと雖も、未だ克つことある能はず。昔は蕭何、韓信をすゝめ、管仲、王子城父を擧ぐ。皆己れの長を忖り、未だ兼ね有すること能はざるが故なり。亮の器は政を理むるによし。抑も亦管蕭の亞流なり。而して時の名將に韓信、城父なし。故に功業陵遲し、大義及ばざらしむ。蓋し天命歸するあり。智を以て爭ふべからざるなり。云々。

陳壽は孔明が奇謀に短にして、將略に長せざることを言ふこと兩度なり。故に之を難ずるものは、壽を以て全く孔明を知らざるものとし、或は壽が父、曾て孔明

の爲に髡せられしことあるを以て、殊更に之を論貶するものとせり。秦觀が諸葛亮論の一節に、

『作る所の八陣圖は後世兵を言ふもの必ず之を稽ふ。則ち亮が變に應ずるの將略、言はずして知るべし。嗚呼、豈に壽が其の父を鋏髡せられたるの故か』

といへるが如き則ち是なり。

陳壽は晉に仕へたる身なれば、晉の承統を正しからしめんが爲に、魏並に司馬氏の爲に廻護する所少からず。彼が手に成れる三國志は、獨り魏に帝號を與へて、玄德をば「先主」、孫權をば「吳主」と稱し或ひは單に名を呼べり。加之、諸臣の傳を記述するにも、大體に於ては魏人に精にして、蜀吳に略なるは、蔽ふべからざる事實なり。故に宋の張栻の如きは別に、諸葛亮の傳を立てゝ一には事蹟の粗なるを補ひ、一には大義の存する所を明かにせんと試みたり。是れ亦大に可し。然れども陳壽が手に成れる諸葛亮傳は、魏の諸名士の傳に比して決して簡略なるものに非ず。寧ろ却て精細なるものあり。殊に其の評論に至りては、滔々として百五十三字を費したる、之を荀彧傳の評に「荀彧清秀通雅、有王佐之風」、然機鑒先識、未能充其志也」の廿二字を以てしたるに比すれば如何。壽が諸葛亮を傳するに於て心を用ふるの深きを知るべきなり。清朝の史家趙翼は曰く、

壽が父、馬謖の參軍たり。謖、諸葛亮の誅する所と爲る。壽が父亦髡せらる。故に壽が亮の傳をつくる、將略は長ずる所にあらずといふと。此れ眞に無識の論なり。亮の及ぶべからざる所は、原必ずしも兵を用ゆるを以て長を見ず。云々（中略）其の（陳壽）孔明を頌する獨り其の大を見ると謂ふべし。（叢記）

又曰く

固より其の諸葛に折服すること深きを知るべし。而して其の父髡せらるゝの故を以て貶を寓すと謂ふは、眞に輕重を知らざるものなり。（叢記）

趙翼の言は頗る其の當を得たり。史家として而かも己れの敬服する古人を評論するに於て、誰か私情を以て筆を曲ぐるものあらんや。故に將略云々に關する陳壽の言の當れるや否やは暫く之を措き、其の志に於ては、吾人固より一點の疑を容れざるなり。否寧ろ父の故あるがために、壽は諸葛亮を傳するに於て、殊に心を用ゐたるを信ずるものなり。

陳壽の言は私情に非ず。さらば孔明果して奇謀に短なるか。將略に乏しきか。奇謀に短なるに非ずして、奇謀を好まざるなり。常に王者の師たるを失はざらんことを期したるなり。事の成らざりしは將略の乏しきが故に非ず。內諸政を整理し、外强敵を挫かざるべからざるに、地は偏僻にして、人材空しく、一身百難に當りて韓信なく城父なきなり。加之、五十四歲の中老を以て、夙く既に長逝す。事の成らざりし所以亦想ひ見るべきにあらずや。

更に一歩を進めて考うるに、事の成敗、奇謀將略の長短は、以て孔明を輕重するに足らず。其の能く大なりし所以は、固より人格の如何に在りて存す。陳壽の言は此の點に關して、其の要を得たるものといふべし。若し孔明にして曹操の如く奇計に長せしめんか、其の人格は大半を破却し去らるべし。『若陳壽者、奚足以知孔明哉』といへるが如き論者、須らく三省すべきなり。

宋の文豪蘇東坡は其の諸葛亮論に於て、孔明が仁義詐力を雜用して以て天下を取らんとしたるが故に、天下義士の望を失ひ事終に成らざりし事を言ひ（本書第六章參照）更に論議を進めて曰く、

曹操既に死して、子丕代り立つ。此の時に當り計を以て破るべきなり。何となれば操の終りに臨み、丕を召して之に植を屬す。未だ嘗て譚尙（共に袁紹の子）を以て戒と爲さずんばあらず。而して丕と植とは、相戰ふに終ること此の如し。此れ其の父子兄弟も且つ寇讎たり。況んや能く天下英雄の心を得んや。此れ間すべきの勢ひあり。數十萬金を捐つるに過ぎずして、其の大臣骨肉、內自ら相戰はしめ、然る後兵を擧げて之を伐つ。此れ高祖の項籍を滅ぼす所以なり。孔明既に其の信義を全ふして以て天下の心を服すること能はず。又其の智謀を奮つて以て曹氏の手足を立つ能はず。宜べなり、其の屢戰ひて屢却くことや。故に夫の敵に間すべき勢ありて間せざるものは、湯武之を行へば、義を失すと爲す。湯武に非ずして之を行へば、機を失すと爲す。此れ仁人君子の大患なり云々。

孔明が劉琮を伐たんとし、又劉璋の地を奪ひたるは詐力に非ず。群雄爭奪の世に於て四百餘年各〻其の主あり。玄德一片の領土なくして天下を爭はんに人を伐つ能はずんば何を以て事を成さんや。吾人は前章に於て既に之を論じ

たり（第六章參照）而して蘇子は更に曹操の死に乘じて離間策を施さんことを孔明に望めり。望むこと何ぞ奇なる。孔明を以て陳平の如くなれよといふか。是れ最も解すべからざる所なり。陳平の智謀奇計は稱すべし。然れども彼が如きは一策士たるのみ。其の人格に於て未だ大に稱すべきものあるを知らざるなり。蘇子の見る所は其の根本に於て既に吾人と異れり。孔明を以て一策士を學ばしめんとするは抑も亦酷ならずや。

次に孔明を難ずるもの秦觀あり。曰く、

愚以爲らく亮は死するなしと雖も曾て以て天下を取るに足らず。況んや禮樂を起すに於てをや、何となれば亮の仕ふる所は蜀の先主、自ら比する所は管中、樂毅なり。先主は人傑と號すと雖も然れども天下を取ることは則ち曹孟德に如かず。一方を保つことは則ち孫仲謀に若かず。其の蜀を得る所以のものは劉璋の闇弱を以てのみ。先主存すと雖も、司馬仲達・陸伯言（遜）皆恙なし。尙ほ以て魏を取るに足らずして死す。其れ能く天下を取らんや。先主に仕ふるが故に、仲達・陸遜の存するが故に、孔明天下を取る能はずといふか。自ら管樂に比するが故に禮樂起す能はずといふか。試に陳龍川の議論を掲げて之と對照せん。

龍川が諸葛孔明論上篇に曰く

故に夫の譎詐は司馬仲達の長ずる所なり。孔明をして此に出でしめば、則ち是れ智を以て智を攻め、勇を以て勇を擊つなり。而して勝負の數未だ判つべからず。正を以て智を攻め、義を以て勇を擊つに孰れぞ。此れ孔明の志なり。而して何ぞ敢て近效を求めんや（中略）故に吾れ嘗て論ず。孔明にして死するなくば、則ち仲達敗れ關中平らぎ魏擧ぐべく吳幷すべく、禮樂起すべしと。（中略）且つ孔明の蜀を治むるは、王者の治なり。治は實なり。禮樂は文なり。焉んぞ其の實を爲して其の文を爲し得ざるものあらんや云々。

天下を取り得るか、將た禮樂起し得るか。得るといひ、得ざるといふ。此の如き議論は深く省みるに足らざるものなり。『若し孔明にして長生せば』といへる假定上の空言なり。斯かる假定を設けざるも既に成りたる功業及び其の充分に發露せられたる人格あり。其の人を評論するに於て餘り有るにあらずや。

陳龍川は其の論の下篇に於て曰く、

夫れ衆人皆進んで我れ獨り退き、草廬に雍容として三顧の後起ちて身を挺し、孤を託せられて放ならず攝ならず。而して人間言なし。權は人主に偪りて上疑はず、勢ひ群臣を傾けて、下忌まず。厲精蜀を治め風化肅然たり。宥過大なく刑故小なし。帝者の政なり。佚道を以て人を使ふ。勞すと雖も怨みず。生道を以て人を殺す。死すと雖も殺者を怨まず。王者の事なり。孔明皆優に之を爲す。眞に其れ伊周の徒たり。

自ら管樂に比するを以て管樂を出でずとするは誤れるの甚だしきものなり。管仲は才識明敏なりと雖も進退節操に於ては、猶ほ許すべからざる所あり。樂毅は將略萬人に秀でたりとするも一時の流言に離間せらるゝは、其人の稍〻輕くして薄きを覺ゆ。孔明自ら之に比せしは一時の寓言のみ。何ぞ之を以て理想とすることあらんや。孔明の人格は眞に伊尹にちかしといふべし。兄弟分れて蜀吳に仕ふるも人疑はず。玄德に勸めて劉璋を取るも人は之を貪ぼれりとせず。國を專らにすること十有二年にして人之を專横なりとせず。何を以て能く此くの如きを得たるか。他なし、其の志し公明正大にして一點の私心なく、君國の爲に一身を棒げて鞠躬盡力終始渝らざりしが故のみ。

第十八章　碑文

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑銘并序

唐裴度

碑高一丈一尺六寸六分。廣五尺七寸。二十四行。行五十字。正書。在成都

度嘗讀舊史、詳求往哲、或秉事君之節、無開國之才、得立身之道、無治人之術、四者備矣、兼而行之、則蜀丞相諸葛公其人也。公本系在簡策、大名蓋天地、不復以云、當漢祚衰陵、人心競逐、取威定霸者、求賢如不及、藏器在身者、擇主而後動、公是時也、躬耕南陽、自比管樂、我未從虎、時稱臥龍、詩曰、潛雖伏矣、亦孔之炤、故州平心、與元直神交、洎乎三顧、而許以驅馳、一言而定其機勢、於是翼扶劉氏、纘承舊服、結吳抗魏、擁蜀稱漢、刑政達於

荒外、道化行乎域中、誰謂阻深、般爲强國、誰爲遲脆、勵爲勁兵、則知地無常形、人無常性、自我而作、若金在鎔、故九州之地、魏有其七、我無其一、由僻陋而啓雄圖、出封疆以延大敵、財用足而不曰凌我以生、干戈動而不曰殘人以逞、其底定南方也、不以力制、而取其心服、震懾諸夏也、不敢角其勝負、而止候其存亡、法加於人也、雖從死而無怨、德及於人也、雖奕葉而見思、此所謂精義入神、自誠而明者矣、若其人存、其政舉、則四海可平、五服可傾、而陳壽之評、未極其能事、崔浩之說、又詰其成功、此皆以變詐之略、論節制之師、以進取之方、語成化之道、不其謬歟、夫委棄荊州、不能遂有三郡、此乃務增德、以吞宇宙、不黷武以爭尋常、及出斜谷、據武功、分兵屯田、謀久駐之計、與敵對壘、待可勝之期、雜乎居人、如適虛邑、彼則喪氣、我方養威、若天假之年、則繼大漢之祀、成先主之志不難矣、且權傾一國、聲震八紘、上下無異辭、始終無愧色、苟非運膺五百、道冠生知、曷以臻於此乎、故玄德知人之明者、倚伏曰、魚之有水、仲達奸人之雄者、嗟稱曰天下奇才、度每迹其行事、度其遠心、願奮短札、以排群議、而文字蚩鄙、志願未果、元和三年冬十月、聖上以西南奧區、寇亂餘孽、罷甿末息、汚俗未清、輟我股肱、爲之父母、乃詔相國臨淮公、由秉鈞之重、承推轂之寄、戎軒乃降、藩服乃理、將明帝道、陬落綏懷、溥暢仁風、閭閻滋殖、府中無留事、宇下無棄才、人知嚮方、我有餘地、則諸葛公、在昔之治、與相國當今之政、異代而同塵矣、度謬以庸薄、獲參管記、隨旌旄而爰止、望祠宇而脩謁、有儀可象、以赫厥靈、雖徽烈不忘、而碑表未立、古者、或拳拳一善者、或師長一城、尚流斯文、以爾來裔、況如在之歎、終古不絕、其可闕乎、乃刻貞石、庶此都之人、存必拜之感云爾、銘曰

昔在先主、思啓疆宇、擾攘靡依、英雄無輔、爰得武侯、先定蜀土、道德城

諸葛武公祠堂碑

池、禮義干櫓、煦物如春、化人如神、勞而不怨、用之有倫、柔服蠻落、鋪敷渭濱、攝跡畏威、雜居懷仁、中原旰食、不測不克、以待可勝、允臻其極、天未悔禍、公命不果、漢祚其亡、將星中墮、反旗鳴鼓、猶走司馬、死而可作、當小天下、尙父作周、阿衡佐商、兼齊管晏、總漢蕭張、易代而生、易地而理、遭遇豐約、亦皆然矣、嗚呼奇謀奮發、美志夭遏、吁嗟嚴立、咸受誦罰、聞之痛之、或泣或絕、甘棠勿翦、駢邑斯奪、緜是而言、殊途共轍、本於忠恕、孰不感悅、苟非誠慤、徒云固結、古栢森々、遺廟沈々、不殄禋祀、以迄于今、靡不駿奔、若有照臨、蜀國之風、蜀人之心、錦江清波、玉壘峻岑、入海際天、知公德音。

元和四年歲次己丑二月二十九日鐫字人魯建　　柳公綽書

第十九章　年表

東漢三國年表

靈帝	光和四	日本成務天皇五十一年、西暦百八十一年
	五	
	六	
	中平元	黄巾賊張角起。八月張角死す。
	二	黄巾賊平定。宦官十三人列侯と爲る。
	三	
	四	
帝	五	劉焉の議により諸州に牧を置く。焉益州の牧たり。四月靈帝崩ず。八月袁紹、宦官を鏖殺す。董卓帝辨を廢す。卓、專横を極む。
	六	
	初平元	正月關東の豪傑兵を擧げ董卓を伐つ。袁紹之が盟主たり。三月、卓、都を長安に遷す。

諸葛亮年譜

諸葛亮生る。

献	二	長沙太守孫堅、卓の兵を破つて洛陽に入る。荊州の劉表、孫堅と戰つて之を殺す。	
	三	呂布、董卓を殺す。曹操、劉兗州史と稱す。關中大に亂る。	
	四	曹操、袁術を破る。	
興平元		劉玄德、豫州刺史たり。	
	二	曹操、呂布を破る。孫策江東を攻略す。	孔明が從父玄に從ひて荊州に入りしは此の年なりといふ。
建安元		曹操、帝を迎へて許に屬る。荀彧、郭嘉等操の謀主たり。	
	二	袁術帝を稱す。袁紹、大將軍と爲り四州を領す。曹操、袁術を破る。	
	三	曹操、呂布を滅ぼす。劉備軍左將軍となる。	孔明、徐元直、石廣元等と遊學せしは此年なりといふ。
帝	四	袁術敗死す。劉備、曹操を伐つ。	
	五	曹操、官渡に袁紹を破る。孫策死して弟權之に代はる。	諸葛瑾、吳に仕ふ。
	六	玄德、荊州に走る。	
	七		
	八		
	九		

	一〇	冀、青、幽、并四州曹操に歸す。	
	一一		
	一二	曹操、烏桓を破る。	玄德、草廬を三顧す。孔明年二十七。
	一三	七月曹操、劉表を伐つ八月劉表卒し其の子琮、操に降る。	孔明、吳に使す。十月赤壁の戰あり。孔明軍師將軍となる。
献	一四	玄德荊州の四郡を領して公安に治す。	
	一五	曹操漢雀臺を造る。周瑜卒して魯肅代る。劉備、龐統を用ゐて治中從事と爲す。	
	一六	馬超、兵を擧げて曹操と戰ふ。	劉璋、玄德を迎ふ、孔明と關羽と荊州に留る。
	一七	孫權、建業に都す。荀彧自殺す。玄德涪城に據る。	
	一八	曹操魏公となり九錫を加ふ。玄德雒城を圍む。馬超、漢中に奔る。	
帝	一九	五月馬超玄德に降る。孫權荊州の返却を玄德に請求す。	孔明、張飛、趙雲等と共に蜀に入る。關羽荊州を留守す。龐統卒す。五月成都を取る。
	二〇	玄德、孫權と荊州を分ち、湘水を以て界とす。張遼、合肥に孫權を破る。	
	二一	曹操魏王となる。	
	二二	玄德兵を漢中に進む。吳の魯肅死す。	

	二三	玄德遂に漢中を有つ。次で漢中王と稱す。關羽魏を伐ちて龐德を斬り于禁を降す。	吳の呂蒙の爲に背後を襲はれ關羽敗死す。
	二四	魏王曹操卒す。冬十月曹丕帝位を簒す。後漢は十二帝百九十六年なり。	
昭烈帝 章武元	二五	四月、玄德帝位に卽く。玄德自ら吳を伐つ。張飛卒す。孫權魏に降る。	孔明成都に留守す。
	二	玄德敗績し歸りて白帝城に駐る。	
後主 建興元		玄德崩ず。太子禪卽位す。	孔明、遺託を受けて政を輔く。鄧芝、吳に使す。吳蜀再び修好す。
	二	魏文帝自ら吳を伐つ。	益州四郡叛す。
	三		孔明南蠻を討平す。
	四	魏文帝崩じ明帝立つ。	
	五	魏明帝太和元年	孔明魏を伐たんとして漢中に屯す。
	六	司馬仲達新城を破り孟達を殺す。	孔明魏を伐ちて街亭の敗あり。冬再び魏を伐ちて陳倉を圍む。拔けず。
	七	孫權帝を稱す。	孔明魏を伐ちて武都陰平二郡を拔く。
	八	魏人漢中に寇す。幾何もなく退く。仲達命を受けて蜀を防ぐ。	

	九	
	一〇	
	一一	孫權、魏の新城を攻めて克たず。	孔明鄢山を圍む。仲達を破り張郃を斬る。
後主	一二	日本熙神天皇三十四年。西曆二百三十四年。	二月孔明北出し五丈原に陣す。孔明陣中に卒す。年五十四。
	一三	魏、洛陽宮を作る。蔣琬大將軍、費禕尙書令たり。	
	一四		
	一五		
延熙元皇帝		蔣琬出でゝ漢中に屯す。仲達公孫淵を伐つて之を斬る。	
	二	蔣琬大司馬となる。	
	三		
	四		
	五		
	六	費禕大將軍となる。	
	七	魏人漢中に寇す。陸遜丞相と爲る。	

八	蔣琬卒す。陸遜卒す年六十三。
九	姜維衛將軍と爲る。
後主 一〇	費禕出でゝ漢中に屯す。
一一	姜維、魏の雍州を伐ちて克たず。
一二	仲達、曹爽を殺す。
一三	費禕出でゝ漢壽に屯す。
皇帝 一四	費禕暗殺せらる。姜維魏を伐ちて狄道を圍む。
一五	
一六	姜維魏を伐つ。
一七	姜維魏軍を破る。
一八	姜維大將軍と爲る。魏を伐ちて敗績す。
一九	姜維魏を伐つ。
二〇	
景耀元	

23

後主 二	
三	
四	
皇帝 五	姜維魏を伐つて克たず。
炎興元	魏將鄧艾成都に逼る。後皇帝降る。魏之を封じて安樂公と爲す。

蜀漢は二世四十三年なり。西曆二百六十三年。

備考、蜀滅亡後二年にして司馬仲達の孫炎、魏を簒す。晉武帝是なり。

諸葛亮 終

諸葛亮 附錄

三國諸豪の面目

三國の世は人材の輩出雲の如し。曹操、孫權、劉備皆能く人を用ゐて、野に遺賢なし。互に人を得るを以て相誇れり。就中、魏は人材最も多く、吳は之に次ぎ、蜀最も少し。試に之を表示せんか。

魏 荀彧。荀攸。程昱。郭嘉。賈詡。鍾繇。劉曄。司馬懿(字は仲達)。夏侯惇。夏侯淵。曹仁。曹洪。曹休。曹眞。曹爽。張遼。徐晃。于禁。樂進。張郃。李典。許褚。典韋。鄧艾。鍾會。張昭。

吳 顧雍。諸葛瑾。周瑜。魯肅。呂蒙。陸遜。大史慈。程普。黃蓋。韓當。甘寧。凌統。徐盛。丁奉。潘璋。

蜀 諸葛亮。龐統。法正。蔣琬。費禕。

關羽。張飛。趙雲。馬超。黄忠。嚴顏。魏延。姜維。

以上は固より其の重立ちたるものを擧げたるに過ぎず。或は智略に或は武勇に各〻傑出する所ありて、以て將たるべく、以て相たるべきものなり。今左に荀彧、審配、荀攸、程昱、郭嘉、張遼、許褚、典韋、鄧艾、鐘會、張昭、諸葛恪管輅、十三雄の小傳を錄す。但し本文に於て既に多く述べたる人物を擧げざるが故に斯かる選擇の結果を來したるなり。見る人諒せられよ。

(一) 荀彧

曹操が謀臣多きなかに、其の才略最も秀で、其の人格最も高きは荀彧なり。彧字は文若、潁川潁陰の人なり。年少なりし時南陽の何顒之を異しみて曰く『王佐の才なり』と。年廿九にして曹操に仕ふ。操大に喜びて曰く『我が子房なり』と。曹操が袁紹(四州を領して勢ひ强大なり)と戰はんとせし時、彧に問ふて曰く『今、不義を討たんとして力足らず。何如すべきか』と。

彧答へて曰く『古の成敗は誠に其の才有れば弱と雖も必ず强。苟も其人にあらざれば、强と雖も弱なり易し。劉項の存亡、以て觀るべきなり。今、公と天下を爭ふものは、唯袁紹のみ。紹は外寛にして內忌み、人に任じて其の心を疑ふ。公は明達拘せず。唯才の宜しき所。此れ度勝なり。紹は遲重にして決少し。失は機に後るゝに在り。公は能く大事を斷じ、變に應じて方無し。此れ謀勝なり。紹が軍を御するや、寛緩にして法令立たず。士卒衆なりと雖も、其の實用ゐ難し。公は法令既に明らかにして賞罰必ず行ふ。士卒寡なりと雖も皆爭つて死を致す。此れ武勝なり。紹は世資に憑り從容として智を飾り、以て名譽を收む。故に士の能寡くして問を好むもの之に歸す。公は至仁を以つて人を待ち、誠心を推して虛美を爲さず。己れを行ふこと勤儉にして、功あるものを賞し、怪惜する所なし。故に天下忠正、實を効すの士、咸用を爲すを願ふ。此れ德勝なり。夫れ四勝を以て天子を輔け、義を扶けて征伐す。誰か敢て從はざらん。紹の强、其れ何をか能くせん』と。

操大に喜び遂に袁紹と戰つて、其の最大强敵を倒すを得たり。曾て後漢の獻帝が長安を出奔せし時も、群雄多く之を奉戴して以て勢力を張るの利を悟らず。

荀彧始めて之を操に勸めて帝を許に迎へしめ、天子を戴きて四方に號令を下すことゝなりぬ。是より操の勢ひ俄に强大なるを致せり。是れ皆彧の獻策に基く所なり。

後、操に稍〻不臣の行爲あり、爵を國公に進め、九錫を以て殊勳を彰さんとす。彧曰く『明公はもと義兵を興し、以て朝を匡し、國を寧んじ、忠貞の誠を取り、退讓の實を守る。君子は人を愛するに德を以てす。此の如くなるべからず』と。操是より彧を喜ばず。彧も亦鬱々として病を爲し、壽春に於て薨じたり。壽五十。

荀彧識略に富みて王佐の材あり。操を佐くと雖も、志し漢室を離れず。末年の情眞に憐れむべきなり。

(二) 審配

審配は袁紹の臣にして忠烈の士なり。荀彧之を評して『審配專にして謀なし』といひたるも亦北方に於ける一豪傑たるを失はざるなり。

袁紹の死後、其の子尙譚相爭ひて、操の乘ずる所となる。袁尙、操と戰つて大に敗れ、一度祁山を保ちしが、更に中山に走れり。審配、士卒を勵まして堅守死戰す。既にして配の兄の子榮といふもの、夜城門を開きて操に降り、城之が爲に陷りて、配も亦生擒せられたり。

操が兵、配を縛して帳下に至る。辛毗曾て配に恨みあり。鞭をあげて配が頭を打ち罵しりて曰く『奴汝、今日眞に死すべし』と。配顧みて曰く『狗輩、正に汝の爲めに我が冀州を破る。恨むらくは我れ汝を殺すを得ざるを。且つ汝今日、能く我を殺し得るや』と。

曹操、配を引見して曰く『前日我れの圍みを行ぐる、何ぞ弩の多きや』と。（配曾て弩を伏せて曹操を射て殆ど中つ）

配が曰く『猶ほ其の少きを恨む』

操曰く『卿の袁氏に忠なる亦自から爾らざるを得ず』と。心中之を活かさんと欲す。然るに辛毗等號哭して之を殺すを請ひしかば、遂に配を斬ることゝなりぬ。（建安九年八月）

冀州の人張子謙といふもの曾て操に降りしが、彼は素より配と善からざるも

のなりしかば、笑つて配に謂つて曰く『正南（審配の字）卿遂に我を如何せん』と。

審配聲を勵まして曰く『汝は降虜たり審配は忠臣たり。死すと雖も豈に汝が生を羨まんや』

刑せらるゝに當り、刀を執るものを叱して北に向はしめて曰く『我が君、北に在り』と。死に至るまで意氣壯烈遂に屈するなし。

袁紹、寛厚にして能く士を養ふ。然れども難に當りて節に死するものは審配一人のみ。

（三）荀攸

曹操曾て荀彧に問ふて曰く『誰か能く卿に代りて我が爲に謀るものぞ』と。彧曰く『荀攸鍾繇可なり』

攸は彧が從子にして字は公達。幼少よりして奇才人を驚すものあり。長じて名聲益高し。曹操之を徵して汝南太守となし、また尚書と爲す。與に語りて大に喜びて曰く『公達は常人にあらざるなり。吾れ之と事を計るを得ば、天下何をか憂へんや』と、終に軍師と爲せり。

曹操の袁紹と戰ふや、紹、大軍を率ゐ河を渡りて操に逼る。諸將皆恐れ、退きて營を保たんとす。攸曰く『之れ敵を擒にする所以なり。奈何ぞ之を去らん』と。操は攸を目して笑ひ、遂に擊つて大に紹を破りぬ。

建安八年、曹操將に劉表（荊州）を征せんとす。偶〻袁譚、袁尚兄弟相爭ひ、譚は使を遣はし來りて操に援を請ふとあり。操群臣を會して此の事を議す。人々皆曰く『表は强敵なり。宜しく先づ之を平らぐべし。譚、尚は憂ふるに足らず』と。攸曰く『然らず。今や天下方に事有り。而して劉表は座して江漢の間を保つ。其の四方の志なきこと知るべきなり。袁氏は四州の地に據る。帶甲百萬、紹、寛厚を以て衆を得たり。若し二子をして和睦して其の所業を守らしめば、則ち天下の難未だ息まざるなり。今兄弟隙を構ふ。其の亂に乘じて之を取らば、天下定むべし。時失ふべからざるなり』と。曹操曰く『善し』、終に其の言を用ゐて先づ北方を定め、操の勢力忽ちにして强大なるを致せり。

曹操攸を封じ表して曰く『軍師荀攸、初め臣を佐けてより、征するとして從はざ

るなし。前後敵に克つは皆攸が謀なり』と。又曰く『忠正密謀、内外を撫寧するは文若(荀彧)是なり。公達之に次ぐ』と。

攸は常に操が帷幄に參するも、時人及び子弟みな其の言ふ所の如何を知るものなかりき。操曰く『公達は外愚にして内智、外怯にして内勇、外弱にして内強、善を伐らず。勞を施すなし。智は及ぶべく、愚は及ぶべからず』と。以て此の謀士の面目を想見すべきなり。

思ふに荀彧、荀攸の二子は其の才謀智略に於ては殆んど相比すべきものか。たゞ彧の清秀にして通雅、王佐の風あるは、攸に於て之を缺きたり。操と相合ふに至りては、却て攸の適切なりしを覺ゆ。

(四) 程昱

程昱字は仲德、東郡東阿の人にして、身の丈け八尺三寸、鬚髯美なり。

初め袁紹と公孫瓚とは頗る親和して、後遂に隙あり。兗州刺史劉岱といふもの曾て兩人と交りあり。爲に去就に迷ふ。或人、岱に語りて曰く『程昱、謀あり。能く大事を斷ず』と。岱乃ち昱を招きて計を問ふ。昱曰く『若し紹が近援を棄て、瓚が遠援を求むれば是れ人を越に假りて以て溺子を救ふに似たり。夫れ公孫瓚は袁紹の敵にあらざるなり。今紹が軍を破ると雖も、然れども遂に紹の爲に擒とせられん。若し一朝の權勢に赴きて、遠計を慮らざれば、將軍終に敗れん』と。劉岱喜びて昱が言に從ふ。果して公孫瓚は大に紹の爲に破られたり。

劉岱、昱を表して騎都尉となす。昱、疾に託して之を辭す、思ふに岱が如きは昱が仕へて大事を謀るに足らざるものなり。昱は去りて曹操に歸せり。

袁紹が曹操と爭ふに當り、大軍を率ゐて黎陽より南渡せんとす。時に昱は七百餘の兵を以て鄄城に在り。操之を危ぶみ二千の兵を增して昱に與へんとす。昱之を謝して曰く『袁紹十萬の衆を擁して自ら向ふ所前なしとす。今昱が兵の少きを見ば、必ず輕易して來攻せざるべし。若し昱が兵を增さば、却つて來り攻めん。たとひ二千を增すも勢ひ支ふべからず。願はくば公、之を疑ふこと勿れ』と。

袁紹は果して昱が兵の少きを聞きて來り攻むることなかりき。曹操賈詡に

語りて曰く『程昱が膽は賁育にも過ぎたり』と。

昱は性剛戾にして多く人を忤ふ。其の智謀、其の膽力、共に一時に傑出せりと雖も、位公に至らず。是れ德業の稱すべきものなきが故か。

(五) 郭嘉

郭嘉字は奉公、潁川陽翟の人なり。初め北に游びて袁紹を見る。而して紹が謀臣辛評、郭圖に語りて曰く『夫れ智者は主を量るに審らかなり。故に百舉百全にして、功名立つべし。袁公は徒らに周公が人に下れるに倣はんと欲して、未だ人を用ゐるの機を知らず。端多くして要少く、謀を好みて決なし。共に天下の大難を濟ひ、霸王の業を定めんとするも難し』と。遂に袁紹の下を去りたり。

是より先、潁川の人戯志才といふものあり。智謀に富みて頗る曹操に重んぜられしが、不幸にして早く卒したり。曹操、荀彧に書を與へて曰く『志才亡びてより後、與に事を謀るべきものなし。汝潁固より奇士多し、誰か志才に繼ぐべきものぞ』と荀彧乃ち郭嘉を薦めたり。

曹操郭嘉を召見して天下の事を論じ、喜びて曰く『我をして大業を成さしむるものは、必ず此の人ならん』と。嘉も亦喜びて曰く『眞に吾が主なり』と。其の相得たること深きを見るべし。

孫策、千里に轉鬪して、悉く江東を有す。曹操の袁紹と官渡に相持するを聞き、將に江を渡りて許(曹操の都城)を襲はんとす。人々之を聞きて皆恐れたり。嘉曰く『孫策新たに江東を併せて、誅する所は皆英雄豪傑にして、能く人の死力を得たるものなり。然るに策輕ろ〳〵しくして備無し。百萬の衆ありと雖も、中原を獨行するに異るなし。若し刺客伏して起らば、一人の敵のみ。吾を以て之を觀るに必ず匹夫の手に死せん』と。

策は果して許貢が客の殺す所となりぬ。

郭嘉深通にして算略あり。曹操曰く『唯奉公能く我が意を知るのみ』と。惜しい哉、年三十有八にして死せり。曹操其の喪に臨みて哀むこと甚だし。荀攸等に語りて曰く『諸君、年皆殆ど我と等し。唯郭公最も少なし。後事を以て之に屬せんとするに、不幸にして中年に夭折す。嗚呼是れ命なり』と。

(六) 張遼

曹操を佐けて四方に轉戰し、武勳赫々たる驍將少からずと雖も、就中張遼徐晃、于禁樂進張郃の五將を以て最も著名なるものとす。

張遼字は文遠雁門馬邑の人なり。初め幷州の刺史丁原の部下に屬し、後董卓に歸したり。卓敗れてより更に兵を以て呂布に屬せしが布は曹操と戰つて大敗せしかば、遼は遂に操に降れり。こゝに於てか初めて良主を得たりとすべし。

袁紹敗れて後、遼は夏侯淵と共に、昌豨を東海に圍みたり。城未だ拔けずして糧食將に盡きんとせしかば、軍を引きて還らんとす。遼、淵に語りて曰く『數日來、我れ城外をめぐる毎に、豨は我に眼を注ぎて所思あるものゝ如し。且つ矢を射ること甚だ稀なり。是れ恐らくは彼が心中に晴れ難き迷霧あるなり。願はくは我れ彼を招きて語らん』と。淵之を諾す。

遼、城外に至りて豨を招く。豨果して來れり。遼曰く『曹公神武方さに德を以て四方を懷く。先づ降るものは大に賞せらるべし』と。豨遂に降ることを約す。

依りて遼は單身、豨が家に入り、其の妻子を拜す。豨、歡喜して遼に隨つて直ちに曹操の下に至れり。

陳蘭、梅成といふものが氐の六縣を以て叛きし時、于禁臧霸等は成を擊ち、遼は別に張郃朱蓋等を督して蘭を擊てり。梅成先づ僞り降りしかば、于禁等兵を返したるに、彼は走せて陣蘭と合し、天柱山に據れり。山は高峻三十餘里、嶮狹にして道纔に通ず。遼兵を率ゐて進まんとす。諸將皆曰く『兵少くして道險なり。深く入り難し』と。遼色を勵まして曰く『勇者は進むるを得るのみ』と。遂に進んで山下に逼り、蘭成を斬つて其の亂を平げたり。

其の後、遼は李典樂進と共に兵七千人を以て合肥城を守り南方を鎭せしが、孫權、十萬の衆を率ゐて來り攻むるに會す。諸將恐るゝ色あり。遼は先づ決死の士八百人を得て自ら之を率ゐ早朝城を出でて、大呼敵陣を衝く。數十人を殺し二將を斬り、幕地に權が麾下に逼る。權大に驚き、走りて高冢に登り、長戟を以て自ら守る。遼、權を叱して下り戰はしむ。權敢て動かず。遼が率ゆる所の兵少きを見て兵をさしまねきて之を圍むこと數重なり。遼、奮擊、敵陣を衝いて出づ。

其の兵の猶ほ出づる能はざるもの呼んで曰く『將軍我等を捨て給ふか』と。遼また還りて圍を突き餘衆を救ひて戰ふ。吳軍は人馬皆披靡して敢て當るものなし。氣奪はれて退き守る。

合肥の役、遼は一戰にして吳軍を挫きしかば、曹操之を賞して征東大將軍に拜したり。文帝位に即くに及びて又、深く之を敬重す。遼の病むや、帝親ら之を省し、御衣を賜ひ、日々御食を送りたりといふ。

(七) 許褚と典韋

曹操が宿衞に二勇將あり。許褚及び典韋と爲す。許褚字は仲康。譙國譙の人なり。長け八尺餘にして腰の太さ十圍。容貌雄毅にして、力量人に絕す。之を我が安倍貞任に比すれば略ぼ相似たりといふべきか。

漢末の亂世に當り、許褚少年及び宗族數千家を集め、共に壁を堅くして寇賊を防ぎたり。時に汝南葛坡の賊萬餘人來りて褚が壁を攻む。壁中人少くして敵すべからず。力戰して疲るゝこと甚だし。箭も亦盡きたれば、褚は人々に命じ、石を集めて四隅に置かしめ、自ら之を擲つに當る所皆摧破す。賊恐れて敢て逼らず。既にして壁中の食將に盡きんとせしかば、僞りて賊と和し、牛を以て易ゆることとなしぬ。賊乃ち食を運び來り、牛を取りて還らんと之を追ひ立てたるに、許褚走せ出し、一手を以て逆しまに牛尾を曳きて行くこと百餘步に及びしかば、賊其の怪力に恐れ、牛を得ずして遁れ去れり。褚は此の事ありて初めて其の武名を遠近に轟かしたり。

曹操が淮如の地を徇へし時、許褚兵を率ゐて之に歸せり。操、一見して之を壯なりとし『此れ吾が樊噲なり』といひ即日都尉に任じて宿衞たらしむ。是より常に操の左右に侍したり。

後曹操に從つて馬超と潼關に戰ふや、曹操、臨濟河を渡らんとして先づ兵を渡し、獨り許褚及び虎士百餘人と南岸に留る。馬超機を見て萬餘騎を率ゐ來りて操に逼る。矢の下ること雨の如し。許褚曹操を扶けて船に上り、左手に馬鞍を以て操を蔽ひ、右手に船を繰りて、僅に免るゝを得たり。此の日褚なかりせば操は殆ど免るゝこと能はざりしなるべし。

曹操が韓遂、馬超と單馬にして會語せんとせし時、唯許褚のみ從へり。馬超も亦武力絶倫の將なれば、不意に突出して操を捕へんとせしに、背後に從ふ一將の眼光爛々たるを見る。故に輕々しく動かず。先づ操に問ふて曰く『公の下に虎侯といふものありと聞く。今何くに在りや』と。曹操顧みて『是なり』といふ。許褚、目を瞋らして超を見る。超遂に動かずして已めり。

褚、謹愼にして能く法を守り、質重にして言少し。曹操之を親愛すること深し。褚も亦心を傾けて之に仕へ、他事あることなし。操の薨せし時は褚も亦號泣して血を吐くに至れり。明帝の世に至りて卒す。謚して壯公といふ。

典韋は陳留巳吾の人なり。形貌魁梧にして膂力人に過ぐ。志節ありて任俠を事とす。襄邑の劉氏は、曾て睢陽の李永と讎たり。典韋、劉氏の爲に李永に復讎せんとし、車に乘り鷄酒を載せ、僞りて候者となりて至る。李永は其の地の豪家にして備衞甚だ嚴なりしが、典韋、入りて直に永と其の妻とを殺し、徐ろに家を出づ。市中の人々大に驚き、之を追ふもの數百人なりと雖も、敢て近づくものなかりき。是より韋の名聲、豪傑の間に知らる。後夏侯惇に屬す。

曹操の呂布と濮陽に戰ふや、布の軍三面よりして操を圍む。布も自ら進んで搏戰し、勢ひ猛烈を極む。典韋數千人を率ゐ長矛を執つて進みしが、箭雨の如くにして目を開くこと能はず。依りて從兵に命じて曰く『汝等賊の來ること五步なる時之を告げよ』と。從兵叫んで曰く『五步なり』典韋、手に十餘戟を持して彼等を薙ぐに、敵兵草の如し。之によりて呂布の軍稍〻退き、曹操免れ歸るを得たり。此の事ありてより操は大に韋が勇武を愛し、都尉に任じて常に左右に在らしむ。

典韋は性忠至にして謹重、侍立終日にして夜は帳の左右に宿し、私宿に歸ること稀なり。好んで大食し長飲す。常に雙戟を帶ぶ。戟の重さ八十斤なり。

曹操の荆州を征して宛に至るや、典韋もまた從ふ。張繡迎へ降りて大に操を饗す。實は繡が心中異謀を抱けるなり。然れども典韋が及徑尺を超ゆる大斧をかざして操の背後に立つあるを見て、容易く發すること能はざりき。十餘日にして繡遂に反し、俄に曹操の營を襲ふ。操出で戰ふて利あらず。輕騎を從へて走り、典韋は門內に戰ふ。長戟を揮つて敵を擊つ。當る所皆倒る。而して敵兵益〻加はり、韋の左右の士殆んど皆死す。韋も亦身に數十創を蒙りたるも、意

氣益〻振ひ、短兵接戰す。敵進んで之れを搏するあり。韋其の兩人を左右の脇に挾み、之を殺して敵中に突入し、また數人を殺したり。然れども創益〻重くして堪へず。目を瞋らし、大に敵を罵しりて死せり。敵兵進んで其の首を取り、傳へて之を觀たり。

曹操は韋の死したるを聞きて之が爲に流涕し、自ら其の喪に臨みて之を哭し、韋の子滿を郎中と爲せり。

(八) 鄧艾

鄧艾字は士載、義陽棘陽の人なり。少にして孤なり。汝南に徙りて農民となり牛を養へり。年十二にして母に隨つて潁川に至り、故の太丘の長陳寔の碑文を讀み、『言文爲世範、行爲士則』の句を見て大に感ずる所あり。自ら名を範、字を士則と定めしが、後故ありて改めたり。

年稍〻長じて都尉學士と爲りしが、口吃なるを以て昇進を得ず。稻田守、叢草吏となる。高山大澤を見る毎に、軍營處を規度し、指畫す。時人多く之を笑ふ。

後、典農綱紀上計吏となり、京師に使して司馬仲達を見る。仲達之を奇とし、召して掾と爲す。是れ艾が中央の舞臺に立ちて其の材力を揮ふべき端緒を得たるものなりき。程なく尚書郎となりぬ。想ふに艾が才は政治に可なり。經濟に可なり。而して最も軍事に可なり。

魏朝、田を廣め、穀を蓄へ、敵を滅ぼすの資と爲さんと欲し、艾をして陳項以東壽春に至るまでの地を行らしむ。艾思へらく、良田も水に乏しければ、以て地の利を盡すに足らず。宜しく河渠を開き、水を引きて灌漑し、大に軍糧を積み、又運漕の道を開くべしと。仍りて濟河論を著はしたり。艾曰く

昔し黃巾を破り、因りて屯田を爲し、穀を許都に積みて以つて四方を制す。今三隅既に定まり、事は淮南に在り。大軍征擧する毎に、運兵過半にして功費巨億、以て大役と爲す。陳蔡の間は土下くして田良し。許昌左右の諸稻田を省き水を併せて東下すべし。淮北に二萬人淮南に三萬人を屯せしむべく、十に二分休して、常に四萬人あり。且つ田し且つ守る。水豐かにして常收西に三倍すべし。衆費を除きて歲に五百萬斛を餘して以て軍資と爲さば六七年間

に三千萬斛を淮上に積むべし。此れ則ち十萬の衆五年の食なり。此を以て吳に乘ずれば、往くとして克たざるなし。

司馬仲達之を納れて事みな施行したり。乃ち正始二年、廣漕渠を開く。東南事ありて、大軍を起す毎に、舟を泛べて下り、江淮に達す。資食儲け有りて、水害無きは、是艾が建つる所の方策なり。亦以て彼が識見の非凡なるを見るべきなり。

當時蜀の將姜維數〻魏の西邊を侵せしかば、艾は嘉平元年、征西將軍郭淮と共に之を拒ぎて功あり。既にして司馬師魏の國政を執るに至り、艾を遷して汝南太守となす。而して艾が在る所は荒野開闢し軍民共に豐かなりき。彼が爲す所は常に富國强兵の實を擧ぐるにあり。

吳の將諸葛恪頗る才名あり。兵を出して魏の合肥新城を圍み克たずして還れり。鄧艾、司馬師に語りて曰く、孫權已に歿して大臣未だ附せず。（中略）恪新に國政を執りて內に其主なし。上下を撫恤して以て根基を立つるを念はず。外事に競ひて其民を虐用し、國の衆を悉して堅城に破れ、死者萬を以て數ふべく、禍を載せて歸る。此れ恪が罪を獲るの日なり。昔は子胥、吳起、商鞅、樂毅、皆時君に任

用せられ、主歿して敗る。況んや恪が才は四賢に非ずして、大患を慮らず、其の亡ぶること待つべきなり』と。恪、歸りて果して誅せられたり。

後、艾は兗州の刺史に遷り、振威將軍に任ぜらる。上書して曰く

國の急とする所は、惟れ農と戰となり。國富めば則ち兵强し。兵强ければ戰ひ勝つ。然らば農は勝の本なり。孔子曰く、食を足らし、兵を足らすと。食は兵の前に在り。上に爵を設くるの勸めなくば、則ち下に財蓄の功なし。今考績の賞をして積粟富民に在らしめば、則ち交游の路絕え、浮華の源塞がるべし。嗚呼、艾は誠に霸者の師たるべきものなり。其の着眼常に富國强兵の上に在りて、終始を一貫す。たとひ王佐の才たらずとするも亦單に一闘將にあらざるなり。

後、安西將軍に任ぜられて、西方の軍事を督し、蜀の將姜維と段谷に戰つて大に之を破る。功を以て更に鎭西將軍となり、又征西將軍に任ぜらる。封邑實に六千六百戶に至る。

荀攸……七百戸
程昱……八百戸
郭嘉……千戸
張遼……二千六百戸
樂進……千二百戸
于禁……千二百戸
張郃……四千三百戸
徐晃……三千一百戸
許褚……七百戸

景元四年秋、魏の相國司馬昭は蜀の姜維が數〻西邊に寇するを患ひ、鍾會、鄧艾に命じて、大に蜀を擊たしむ。姜維之を拒ぎて利あらず、退きて劍閣を守る。鍾會兵を進めて之を攻むるも拔く能はざりき。

艾は陰平道より進みて、無人の地を行くこと七百里。山を鑿ち道を通じ、或は橋を架して行く。山高く谷深くして艱難言ふべからず。兵糧亦乏しくして一軍殆んど危殆に陷りしが、險路將に盡きんとする所艾自ら氈を以て身を裹み、推轉して下る。將士皆木に攀ぢ崖に緣り、魚貫して進む。此くして以て敵の不意に出で江由に至れり。

曾て中亞の英雄タメルランが傳を讀みたるに、彼が印度に侵入せんとして雪中にヒンヅクシ山を踰えたる時、路險にして步むべからず。即ち兵士を毛氈に包みて推轉し、己れは太き綱に縋り籠に乘りて下り、忽然としてパンジャブ平原に出で、一擧にして敵の膽を破りたることあり。正に鄧艾が爲す所と相似たり。其の備無きに乘じ、其の不意に出づるは兵法の秘奧なり。名將の見る所東西相同じ。艾が用兵の奇拔なること驚くべきなり。蜀の將何ぞ之を支ふべき。馬邈先づ降る、諸葛瞻は緜竹に陣して艾を待てり。艾は其の子忠と司馬師纂とをして瞻を擊たしむ。忠と纂とは一戰して利あらず、退きて曰く『賊未だ擊つべからず』と。

艾怒りて曰く『存亡の分此の一擧にあり。何の不可なることかあらん』と。乃ち忠、纂を叱し、將に之を斬らんとす。忠、纂馳せ歸りて再び戰ひ、大に敵軍を破りて、瞻の首を獲たり。

勝に乘つて軍を進め、雒に至りし時、後主劉禪、面縛して降る。艾之を受けて自ら其の縛めを解き、且つ蜀の吏民を綏撫せしかば、蜀人大に之を稱せり。

艾自ら矜りて、蜀の士大夫に語りて曰く『諸君幸に我に遇ふ。故に今日あるを得たるのみ。若し吳漢（光武帝の將）の徒に遇はゞ、已に殄滅せらるべきなり』と。

又曰く『姜維は自ら一時の雄兒なり。我と相値ふが故に窮するのみ』と。識者之を笑ふ。

艾、司馬昭に上書して勝に乘じ吳を取らんことを言へり。昭用ゐず。既にして鍾會、師纂等相次で昭に書を送り、艾が爲す所悖逆甚だしきを訴ふ。是に於てか詔書あり。艾を捕へ檻車にて送致せしむ。鍾會、乃ち成都に入りて先づ艾を送り、然る後に亂を爲せしが、事敗れて死す。魏の將士また艾を追ふて緜竹の西に於て之を斬り、併せて其の子忠を殺す。

昔し韓信は兵家の仙を以て稱せらる。奇略縱横、强敵を挫き、堅城を陷るゝこと囊中の物を探るよりも易し。然るに功成り、名遂げて後、人情反覆の間に處するや朔鏡翳りを生じ、利刃銹を來たせるが如く、戰場の才も才ならず、空しく高祖が胸中の火に燒かれて倒る。吾人は切に其の末路を憐れみ同時に張良の智を稱するを禁ずる能はざるなり。艾や絶世の才ありて、且つ用兵の妙諦を得たり。然るに蜀を取りて、功を樹つるの後、彼が如きの末路を來したるは何ぞ。貧しきものは怠らず。碌々たるものは罪を得ることなし。功名富貴に處するは人の難しとする所。玉を抱いて恐るゝことを知らざれば、必ず禍を招く。艾の智にして猶ほ鍾會を知らず、司馬昭を知らず。世を蓋ふの功ありて自ら抑損するなく、却て矜伐の情を恣にす。身を保つの道に非ること明らかなり。嗚呼世情の險は蜀道の險よりも險なり。鄧を憐れむべきなり。

（九）鍾會

鍾會字は士季、潁川長沙の人なり。少にして敏慧驚くべきものあり。中護軍蔣濟といふもの、會を見て異しみて曰く『是れ常人にあらざるなり』と。會時に年五歲なりき。長ずるに及んで才略技藝あり。博學にして名理に精練す。漸くにして聲名あり。

正始年間、秘書郎となり。更に尚書中書侍郎に遷る。毋丘儉の亂を爲すや、大將軍司馬師兵を率ゐて東征す。會其の軍に從つて幕議に參す。既にして司馬師軍中に卒せしかば弟司馬昭之に代りて軍を統べ、會は又其の帷幄に在り。後諸葛誕が叛せし時も、司馬昭を助けて討伐の策を立て勳功著しくして、昭の之を親待すること日に隆なり。時人之を子房と稱す。司隸校尉に任せらる。時政の損益、當世の興奪、預からざる所なし。

當時稽康といふものあり。所謂竹林七賢の一人なり。天質自然にして恬淡寡慾、學問亦該博にして通せざる所なく、頗る盛名あり。鍾會は何の意ありたるにや、一日彼を訪ねたることあり。偶〻康は尙秀（七賢の一）と共に大樹の下に鍛冶しつゝありたり。會至れども之を禮せざるのみならず、鍛ゆることをも輟めざりき。會も亦默然として立てり。暫くにして會の去らんとする時、康之れを顧みて曰く『何の聞く所ありて來り、何の見る所ありて去るか』と。會曰く『聞く所を聞きて來り、見る所を見て去る』と。是より康に含む所あり。彼が後年死に處せられたるは會が謀によるといふ。才人の才を以て權要に立つや、動もすれば此の如き害毒を流さんとす。愼しむべきなり。

蜀の姜維、數〻出でゝ魏の西邊を侵す。司馬昭思へらく蜀は小國にして民疲れ資力亦竭く。宜しく大擧して之を取るべしと。會も亦蜀を圖るべしと爲し共に地形を調査し、事務を考論せしが、機遂に熟し、景元三年の冬會は鎭西將軍假節都督關中諸軍事に任せられ、專ら蜀を伐つの任に當れり。同四年、鄧艾、諸葛緒各々三萬人を率ゐて進み、會は自ら十萬の衆を督して、斜谷、駱谷より入る。姜維退きて、劍閣を守る。會進みて之を攻むるも克つ能はずして日を送りたり。艾が此の間に蜀道の險を踰えて不意に成都を襲ひ、後主劉禪を降したるは、艾の傳に於て述べたるが如し。

後主既に降りしかば、姜維も亦餘儀なく會に降れり。會は士卒を禁檢して抄掠することを得ざらしめ、己れを空しくして以て蜀の士人に接し、姜維と情好甚だ密なり。朝廷會が功を稱して邑を增すこと萬戶なり。

會大兵を擁し蜀に入りて異志あり。姜維之を煽動し、亂に乘じて恢復の業を遂げんとす。劍閣の空雲に怪色あり。

會、先づ鄧艾が反狀あることを上表す。詔ありて艾を捕へしむ。監軍衞瓘艾を收めて檻車に入れ將に之を送らんとす。會が憚る所のものは獨り艾あるのみ。今彼は既に檻車中の人なり。會、自ら思ふ。功名世を蓋ふ。人の下たるべからず。加ふるに猛將銳卒皆我が手に在りと。遂に成都に於て反を謀る。

姜維蜀の將士を率ゐて、斜谷より出で、會は自ら大軍を以て其の後につぎ、直に長安に至り、騎士は陸路より步卒は水道より、流れに順つて渭より河に入り、五日にして孟津に至り、水陸の兵洛陽に會して天下定むべきなりと。是れ會と維とが策する所なりき。偶〻司馬昭が書あり。曰く。

恐らくは鄧艾或は徵に就かざらん。今中護軍賈充を遣はし步騎萬人に將とし、徑ちに斜谷に入り、樂城に屯せしむ。吾れ自ら十萬に將として長安に屯す。相見る近きにありと。

會愕然たり。司馬昭の慧敏なる驚くべきものあり。畢竟艾、會、亦彼が藥籠中のものに過ぎざるなり。

會は事の既に露顯したるを悟り、速かに發して大事を決せんとせしが。諸兵亂を爲して城中に闖入するあり。會、驚きて姜維に謂つて曰く『兵の來る、惡を作さんとするものに似たり。當に奈何すべき』維曰く『當に擊つべきのみ』と。乃ち命じて諸牙門を閉鎖せしめしが、亂兵梯により城に登り、蟻附亂進す。矢の下ること雨の如し。姜維、防ぎ戰つて五六人を手殺して討死し、會も亦殺されたり。會時に年四十。才人の才も亦恃むべからざるなり。

（一〇）張昭

江南の地豪俊多し。就中武勳に於ては周瑜、文勳に於ては張昭を推すべし。張昭字は子布彭城の人なり。少にして學を好み、隸書を善くす。群書を博覽して才識非凡なり。

孫策の江南に入るや、張昭と相見て大に喜び、長史撫軍中郎將と爲し之を待つに師友の禮を以てしたり。かるが故に文武の事一々擧げて昭に委ねたりといふ。昭北方の士大夫の書疏を得る毎に專ら昭の美を擧ぐ。昭之を孫策に告げざれば私あり。告ぐれば己の美をいふ。進退安からず。策之を聞きて曰く『昔

し管子齊に相たり。一にも則ち仲父、二にも則ち仲父、而して桓公は霸者の宗たり。今子布賢なり。我れ能く之を用ふ。其の功名獨り我にあらずや』と。策固より英雄の氣象あり。豁達稱すべし。而して深く張昭を敬す。亦以て昭の凡材にあらざるを知るべきなり。

策の將に死せんとするや、弟權を以て昭に託す。昭、群臣を率ゐて權を輔け長史たること故の如し。孫權年少氣鋭なり。田獵する毎に、虎を射て以て自ら樂む。昭色を變じて諫めて曰く『將軍何すれぞ斯くの如くなる。夫れ人君たるものは能く英雄を駕御し、群賢を驅使すべし。原野に驅逐して、勇を猛獸に校ぶべきにあらざるなり。若し一旦の患あらば天下の笑を奈何せん』と。權之を謝して曰く『年少にして事を慮る遠からず。此を以て君に慚づと』。然れども虎を狩るの一事は終に之を已むること能はざりき。

權、嘗て武昌に於て釣臺に臨み、酒を飲みて大醉し、人をして水を群臣に灑がしめて曰く『今日酣飲、たゞ醉ふて臺中に墮つれば則ち已むべきのみ』と。昭は色を正して言はず。外に出でゝ車中に坐す。權、人をして昭を呼び返へさしめて曰く『共に〳〵樂を爲すのみ。公何ぞ怒るか』昭曰く『昔し紂王糟丘酒池、長夜の飲を爲す。當時亦以て樂を爲す。以て惡を爲すといふにあらざるなり』權、默然として慚づる色あり。遂に酒を罷む。

初め權、丞相を置かんとし、衆議昭に歸せしが權聽かずして孫邵を用ゐ、更に顧雍を擧ぐ。權は昭を用ゐて其の能を盡さしむる能はず。兩者の性格の相違甚だしかりしに依るか。

權が帝號を稱するの後は、昭、老病の故を以て官位を上還したれども權は之を輔吳將軍に任じ、婁侯に封して邑萬戸を賜へり。然れども昭は以後多くは閑散に在りて左氏傳解、論語註を著したり。

昭、朝見する毎に辭氣壯厲、直言を敢てするを以て權の意に忤ひ、暫らく進見することなかりき。偶〻蜀使來りて蜀の美を稱す。群臣之を拒むなし。權歎じて曰く『張公をして座に在らしめば、彼れ折かずして自ら廢せん。いかで自ら誇らんや』と。明日中使を遣はし、勞問して昭を招く。座定まりて昭の曰く『昔し太后、桓王、老臣を以て陛下に屬せず。陛下を以て老臣に屬したり。是を以て臣節

を盡して以て厚恩に報いんとするも、思慮淺短にして盛旨に違逆す。自ら溝壑に棄てらるゝを分とす。圖らざりき、また引見を蒙りて、帷幄に奉ずるを得んとは。然れども臣が國に事ふるの志は忠益に在り。此の如くにして命を畢らんのみ。若し乃ち心を變じ、慮を變へて容を偸み客を取るは、此れ臣の能はざる所なり』と。權厚く之を謝す。

遼東の公孫淵、魏と相爭ひ、吳に使を遣はし來りて藩と稱せしかば、權もまた使節を遣はし、淵を拜して燕王と爲さんとす。昭諫めて曰く『淵は魏に背きて討たるゝを懼れ、遠く來りて援を求む。固より其の本志にあらざるなり。若し淵、計を變じ、魏と親しまんとするあらば、我が使者歸り來るとなかるべし、然る時は笑を天下に取らざらんや』と。權、之を辯解して相反覆す。昭の意いよ〳〵切なり。權も亦堪ふる能はず、刀を按じて怒りて曰く『吳國の士人、宮に入りては則ち我を拜し宮を出でては則ち君を拜す。我の君を敬ふこと亦至れりと爲す。然るに數〻衆中に於て我を折く。我れ恐らくは計を失はん』と。昭、權を熟視して曰く『臣、言の用ゐられざるを知ると雖も、常に愚忠を竭すものは、誠に太后の遺詔顧命の言、耳に在るを以てのみ』と。涕泣横流す。權も亦刀を擲ちて地に致し、昭と相對して泣く。然れども遂に昭が言を用ゐざりき。

昭は言の用ゐられざるを怒り、疾と稱して朝せず。權、之を恨み土を以て其の門を塞がしめたれば昭も亦內より土をもて之を封じたり。

其の後公孫淵は果して吳の使者を殺せしかば、權大に悔ゆる所あり。數〻昭を慰謝するも昭出でず。依りて權は自ら昭が家の門を過り、昭を呼ぶ。昭、疾を以て辭す。權其の門を燒きて恐れしめんとせしに、昭は更に堅く戶を閉ぢたり。權、人をして火を消さしめ門に留まること良〻久し。昭が諸子、共に昭を扶けて起つ。權、載せて以て宮に還り、深く自ら克責す。

昭は容貌矜嚴にして威風あり。權常に曰く『我れ張公と言ふ時敢て妄ならざるなり』と。邦を擧げて之を憚れり。嘉禾五年八十一にして卒す。權、素服臨弔し、謚して文侯といふ。

（一一）諸葛恪

諸葛恪字は元遜、瑾が長子なり。少にして才名あり。論辯當るものなし。顧譚、張休等と共に太子登に侍して道藝を講論し、並に賓友たり。左輔都尉に任せらる。

恪が父瑾（字は子瑜）面長くして驢に似たり。孫權大に群臣を會し、人をして一驢を牽き入れしめ、其の面を檢し、題して曰く『諸葛子瑜』と。恪跪いて筆を請ひ、二字を加へんとす。權之を許す。恪筆を取りて『之驢』と加ふ。舉座歡笑す。權即ち驢を恪に賜ふ。

或時、權、恪に問ふて曰く『卿が父と叔父（諸葛亮）と孰れが賢なる』對へて曰く『臣が父優されり』權其の故を問ふ。恪曰く『臣が父は事ふる所を知り、叔父は之を知らず。故に優れりと爲す』權大に笑ふ。

太子登、或時恪を嘲りて曰く『諸葛元瑾、馬矢（糞也）を食へ』と。恪曰く『願はくは太子鷄卵を食せよ』と。權之を聞きて曰く『人は卿に馬矢を食せしむるに卿は人に鷄卵を食せしむるは何ぞや』恪曰く『出所同じければなり』と。權大に笑ふ。恪が才捷概ね此の類なり。

恪長じて身長七尺六寸、鬚眉少くして折額高顴、大口にして高聲なり。丹陽の山地を平定して殊勳をあらはし、次で威北將軍に任せらる。兵を率ゐて北出し又功あり。陸遜卒するの後、恪大將軍に拜せられて武昌に駐り、荆州を領したり。久しうして權、病あり。恪を以て太子太傅中書令となし、孫弘を少傅となし、後事を屬して死せり。葬禮終りて後恪が政治は專ら恩澤を加ふるに在りしかば、人民皆之を悅び、恪が出入する毎に、百姓頸を延べて其の狀を見んと願へり。

建興元年、恪、衆を東興に會して大堤を作りしが、魏將胡遵、諸葛誕等七萬の兵を率ゐて來り攻むるに遭ふ。恪、兵四萬を率ゐて之と戰ひ、奇計を出して大に敵軍を破る。是れ恪が得意の頂點なりき。荆揚の州牧を兼ねて中外諸軍事を督す。吳國の事、擧げて彼が雙肩に懸れるものゝ如し。

建興二年、恪また大擧北征せんとす。彼が心中早や敵を輕んじたるなり。諸大臣民力を疲らすの得策にあらざるを說きて之を諫めしが、恪遂に聽かず。大兵二十萬を出して新城（合肥）を圍む。連月にして城拔けず。士卒疲勞して病者續出す。餘儀なく兵を退けたり。是に於て衆庶失望し、怨謗頻りに興る。

恪征戰に失敗して後は、諸有司を更選して、愈〻威嚴を治め、罪責する所多し。孫峻といふものあり。私に恪を除かんと謀り、置酒して恪を請ず。恪、之を諾ず。其夜精神亂れて通夕眠る能はず、明朝盥漱せんとするに水腥臭あり。侍者衣を捧ぐるに衣服も亦臭し。恪怪しみて衣を易ふるも、臭氣始の如し。既にして出でんとすれば、犬其の衣を引く。恪曰く『犬も亦我が行くを欲せざるか』と。還り坐すること數刻、再び起つ。犬また其の衣を引く。恪從者をして犬を追はしめ、遂に車に昇る。

孫峻は既に兵を帷中に伏せ、自ら出てゝ恪を迎ふ。恪、劍履殿に上りて坐す。心中頗る疑ふ所あるものゝ如く、酒を設くるも之を飲まず。峻曰く『使君病未だ癒えず。常服藥酒あるべし。自ら之を取り給へ』と。恪意稍〻安んじて自ら携ふる所の酒を呑めり。酒數行にして峻起つて廁に行き、須臾にして長衣を解き短服を着けて出づ。呼んで曰く『詔あり。諸葛恪を收む』と。

恪驚き起ちて未だ劍を拔くに遑あらず。峻が刃は猛烈に切りおろされたり。座に在りたる張約といふもの、傍よりして峻を切る。峻顧みて約を切り其の右臂を斷つ。武衞の士、皆走りて殿に上る。峻曰く『取る所のものは恪なり。今既に死せり』と。悉く刃を收めしめ地を除きて更に飲めり。

恪、才を恃み、傲慢にして輕薄なり。國家の爲めに思ふこと深からずして、名利の念火よりも熾なり。終に禍を速ぐ。陳壽之を評して曰く『矜己陵人。能無敗乎』眞に然りといふべし。

（一二）管輅

三國の世、方技を以て著はるゝもの甚だ多し。華佗の醫術に於ける、杜夔の聲樂に於ける、其の他朱建平の相術、周宣の相夢、管輅の占術、皆玄妙の殊巧、非常の絶技なり。中に就きて左に管輅の小傳を揭ぐ。

管輅字は公明、平原の人なり。年七八歲にして好んで天文を視て、肯て寢ねず。父母之を禁ずれば、輅曰く『我れ年少なりと雖も、然れども眼中喜んで天文を視る』と。又曰く『家雞野鶩も猶ほ時を知る。況んや人間に於いてをや』と。比隣の童兒と共に戲るゝに、地を畫して、天文及び日月星辰を作り、之を解說す。言語非凡

にして宿學者人も之を折く能はざりき。年稍〻長ずるに及びて、周易に通じ、能く風角を見て、占相の道、精微ならざるなし。體性寛大にして含受する所多し。常に德を以て怨に報いんと期し、父母に事へては孝篤、兄弟には順、能く士友を愛す。然れども容貌粗醜にして威儀なく、酒を嗜みて飲食言戲、非類を擇ばず。故に人多くは之を愛して而して敬せざりき。

輅の父は利漕たり。利漕の民郭恩（くわくおん）といふもの兄弟三人皆躄疾を得たり。輅之を筮して曰く『卦中、君が本墓あり。墓中に女兒あり君が伯母にあらざれば叔母なり。昔、饑荒の世に其の數升の米を取らんとしてこれを井中に推し落したるものあり。加ふるに一大石を投下して其の頭を破りぬ。されば孤魂寃痛、自ら天に訴ふるなり』と。恩之を聞きて涕泣し、昔日の罪狀を自白したりといふ。

信都令の家、婦女驚き恐れて更互に病むことあり。輅に筮を請ふ。輅曰く『君が此の堂の西邊に兩つの死男子あり。一男は矛を持ち一男は弓箭を持つ。頭は壁内に在りて、脚は壁外にあり。矛を持するものは頭を刺すことを主（つかさど）る。故に頭重く痛みて擧ぐること能はざるなり。弓箭を持するものは胸腹を射ることを主る。故に心中縣痛して飲食を得ざるなり。晝は則ち浮游し、夜來りて人を病ましむ。故に驚恐有るなり』と。是に於て骸骨を掘りこれを徙す。家中皆癒えたり。

清河王經、官を去りて家に還り、輅と相見る。經曰く『近頃一怪あり。之を喜ばず。願はくは之を占せよ』と。輅曰く『爻吉なり。怪と爲さず。君、一夜堂の戸前に在り。一流光の酒杯の如きものあり、飛んで君が懷中に入り、般々として聲あり。内神安からず。衣を解きて彷徉し、婦人を呼びて餘光を求むるなり』と。經大に笑つて曰く『實に君の言の如し』。輅曰く『吉なり。官を遷すの徵なり』と。少頃（しばらく）にして經は果して江夏の太守と爲れり。

輅また郭恩が家に至る。鳩あり。來りて梁頭にとゞまり、鳴くこと甚だ悲し。輅曰く『まさに老公の東方より來るあるべし。豚一頭、酒一壺を携ふ。主人喜ぶと雖も、恐らくは小故あるべし』と。明日果して客あり。占ふ所の如し。恩、客をして酒を節し、肉を戒め、火を慎ましめ、鷄を射て以て食を作る。其の箭、樹間より飛びて數歳の女子の手に當り甚だしく血を流したり。

輅が族兄孝國斥丘に居る。輅往いて其の家に在り。二客と會す。客去るの後、輅孝國に謂つて曰く『此の二人、天庭及び口耳の間、同じく凶氣あり。異變俱に起りて雙魂宅なく、魂は海に流れ、骨は家に歸せん。少許時にして並び死すべし』と。後數十日にして彼の二人酒を飲み、醉ふて共に車に載る。然るに車の牛何者にか驚きたりけん、道を走せ下りて河中に入り、急ち溺死したり。

吏部尚書何晏、輅を請ず。鄧颺また座に在り。晏、輅に語りて曰く『聞く君は占術神妙なりと。試に一卦を作れ。位三公に至るや否やを知らん。又我が夢に青蠅數十、來りて鼻上に在り。之を追へども去らず。何の意ぞや』と。輅曰く『此れト筮の明かにする所に非ず。今、君侯は位山嶽よりも重く、勢ひ雷電の如し。而して德を懷ふもの鮮く、威を恐るゝもの多し、殆ど小心翼々たる多福の人に非ず。又鼻は此れ天中の山、高くして危うからず。長く貴きを守る所以なり。今青蠅は臭惡なるものにして之に集る。位峻きものは顚へり。輕豪なるものは亡ぶ。願はくば君侯、上は文王六爻の旨を追へ、下は尼父が彖象の義を思はゝ、然る後三公決すべく、青蠅拂ふべきなり』と。晏等悅ばず。輅、邑舍に歸りて具さに此の事を舅氏に語る。舅氏、輅の言の過酷なるを責む。輅曰く『死人と語る何の畏るゝ所かあらん』と。舅大に怒り輅を以て狂悖と爲す。然るに歲朝、西北の大風あり。塵埃天を掩ふ。十餘日にして晏と颺との皆誅せられたるを聞き、舅氏始めて輅に服したり。

輅魏郡の太守鍾毓を訪ふて共に易義を論ず。輅曰く『卜して君が生死の日を知るべし』と。毓、先づ其の生年月を筮せしむるに、輅の言一々適中す。毓大に驚きて曰く『君は畏るべきなり。死は以て天に付す。君に付すべからず』と、遂に死年月をば筮せしめずして已む。

平原の太守劉邪、印囊及び山鷄毛を取り、之を器中に入れて伏せ置き、輅をして筮せしむ。輅曰く『內方外圓、五色文を成す。寶を含み信を守る。出づれば則ち章あり。此れ印囊なり。高嶽巖々として鳥有り。朱身にして羽翼玄黃、鳴くこと晨を失はず。此れ山鷄毛なり』と。

正元二年、輅の弟辰、輅に語りて曰く『大將軍の君を待つこと甚だ厚し。冀くは富貴なるべきか。』輅長歎して曰く『我れ自ら分直あるを知るのみ。然れども天

我に才明を與ふ。我に年壽を與へざるなり。恐らくは四十七八の間、女嫁し、兒娶るを見ざるべし。若し此を免るゝを得ば洛陽の令たらんと欲す。路遺ちたるを拾はざらしめん。但恐る、太山に至りて鬼を治め、生人を治むるを得ざるを』と。辰其の故を問ふ。輅曰く『吾が額上生骨無く、眼中守精なく、鼻に梁柱なく、脚に天根無く、背に三甲なく、腹に三壬なし。此れ皆不壽の驗なり。又吾が本命は寅に在り。加ふるに月食夜生ず。天に常數あり。諱むことを得ず。たゞ人知らざるのみ。吾れ前後死に當るものを相すること百人に過ぐ。略ゞ錯り無きなり』と。果して明年の二月に卒せり。年四十有八。

諸葛亮附錄　終

諸葛亮奥附
正價金壹圓

大正二年十一月廿七日印刷
大正二年十一月廿八日發行

著者　杉浦重剛
著者　猪狩又藏
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　高橋季吉
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
（振替貯金口座東京二四〇番）

不許複製
帝國圖書館藏

千頭清臣君
川田正澂君
大町桂月君　共編

（東西偉人肖像十三葉挿入）

台覽

東西偉人言行錄

（全一冊）洋裝四六判紙數五三〇頁
正價金壹圓
郵稅金八錢

本書は辱くも　皇太子殿下兩皇子殿下の台覽を賜はる、發賣後日猶淺きも江湖の賞讃を博し好評嘖々たるもの所以なきにあらざるなり。夫れ人物を作るものは人物也。平生多くの人物に接すれば自から人物となるべし。人物の模範を示すことは、今日の日本の國勢上殊に教育上の急務たらずんばあらず、編者諸氏茲に觀る所あり、拮据經營十數月。普ねく古今東西に於ける偉人傑士の事蹟を蒐集し、苟くも青年子弟に活感化を與ふるものは悉くこれを網羅して餘さず、その用意の周到なる取捨選擇の宜しきを得たる、實に方今斯種著述の代表たるを失はず、青年子弟も讀め、父兄も讀め、更に世の教育者諸氏も讀め。

文學士　東海林辰三郎君著

名將逸話　時代の武士

（全一冊）洋裝菊判南京綴
紙數六三〇頁
正價壹圓拾錢
郵稅金拾貳錢

本書は國民の讀物として編述せられたるものにして著者は上古より維新に至る我國武士の變遷を說き各時代に於ける武士の特質を叙述し更に其代表的武士百四十名を選んで其言行逸話を記したれば一面武士の變遷史たると同時に一面又名將勇士の言行錄たり而して著者は各時代の武士の特質を闡明するに之が理論よりも寧ろ其例話に重きを置き力を專ら逸話の蒐集に注ぎ流麗の筆を以て名將勇士の半面を描き來る所實に一篇の活小說にして彼の無味を嚙むが如き一般傳記類と大に其選を異にす春の朝夏の夕之を以て消閑の侶とせば古英雄と親しく相語るの感あらん敢て江湖の一讀を俟つ。

文學博士 三島毅先生
文學博士 服部宇之吉先生
文學博士 高瀨武次郎先生 監修
文學士 久保天隨先生校訂
中村不折畫 伯裝幀

校註 漢文叢書

全十二冊

（第一期刊行）

空押色刷模樣
天金綾製本頗瓏瓏
菊判總クロース上製

正價 毎冊 金壹圓
小包料各十二錢

既刊書目

第一冊 論語 紙數一一七〇頁
第二冊 孟子 紙數一二四六頁
第三冊 大學中庸孝經 紙數七二八頁
第四冊 唐詩選三體詩 紙數一二七八頁
第五冊 七書 上卷 紙數九九二頁
第六冊 七書 下卷 紙數七五〇頁
第七冊 蒙求 紙數八九六頁

續刊書目

書目	選定書
第八冊 詩經	毛詩國字辨
第九冊 小學	小學句讀口義詳解
第十冊 近思錄	近思錄集解便蒙詳說
第十一冊 古文眞寶 前集	古文前集抄
第十二冊 同 後集	古文後集抄

東京日々新聞は本叢書を評して曰く

平易なる國文を用ゐて經典の奧義を釋し通俗本として普ねく世に行はれたるものこれが復刻は漢學普及の爲めとしては最も選擇を得たりとすべし中村不折氏の青磁色を象りたる裝釘は高雅愛すべく此大冊な一冊一圓にて供給するは流石博文館にあらざれば能はざることなり

支那文學全書

全廿四冊

洋裝四六判一冊約四五〇頁
五冊以上八分引十冊以上一割二分引
廿冊以上一割五分引（郵稅各金八錢）

正價 毎冊 金參拾錢

（壹編）四書講義（大學中庸論語）內藤 耻叟君講述
（貳編）四書講義（孟子）內藤 耻叟君講述
（參編）小學孝經忠經講義 內藤 耻叟君講述
（四編）老子列子孫子吳子講義 小宮山綏介君講述
（五編）韓非子講義（上）小宮山綏介君講述
（六編）韓非子講義（下）小宮山綏介君講述
（七編）莊子講義（上）太田 淳軒君講述
（八編）莊子講義（下）太田 淳軒君講述
（九編）正文章軌範講義 石川 鴻齋君講述
（十編）荀子講義（上）城井 悔庵君講述
（十一編）靖獻遺言講義（發賣停止）
（十二編）唐詩選三體詩講義 太田 淳軒君講述
（十三編）續文章軌範講義 石川 鴻齋君講述
（十四編）荀子講義（下）城井 悔庵君講述
（十五編）十八史略講義（上）太田 淳軒君講述
（十六編）近思錄講義 內藤 耻叟君講述
（十七編）十八史略講義（下）太田 淳軒君講述
（十八編）戰國策講義（上）平井 魯堂君講述
（十九編）戰國策講義（下）平井 魯堂君講述
（廿編）墨子文中子講義 內藤 耻叟君講述
（廿一編）詩經講義 小宮山綏介君講述
（廿二編）史記列傳講義（上）城井 悔庵君講述
（廿三編）史記列傳講義（中）城井 悔庵君講述
（廿四編）史記列傳講義（下）城井 悔庵君講述

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 箕作元八君著

西洋史新話

全部凡十冊

菊判南京綴美本

地圖及密畫挿入

第一冊 ギリシアの擾亂

版 六

紙數 二一六頁
正價 金五拾五錢
郵税 金八錢

目次

●東西文明の代表國●兩國間の風雲●國難に備ふる英雄の先見●マラトンの鬨の聲●アテネの海軍擴張●ペルシヤの大擧遠征●テルモピレーの血雨●アルテミシオン沖の烽火●司令官會議の激論●軍議を決する苦肉の策●女傑の獻策●サラミス水道の腥風●敵愾の飛礫●プラテイエイ原頭の獅屍●デロス神殿の會盟●築城の人質●他目を憚る女車●現代文明の基礎

第二冊 テーベの勃興

版 四

紙數 二五六頁
正價 金五拾五錢
郵税 金八錢

目次

●怒は深き親子塚の由來●將軍大膳頭となる遠征の途●側面の海上威壓背後の離間●ボイオチアの風土テーベ人の氣質●驕王の鼻梁を挫く祭事の妨害●亂槍一將を倒し舌鋒一將を葬る●遠征の將を召還する本國の近憂●會稽の恥を雪ぐクニドスの血の波●堅陣を突破するテーベ人の猛勇●スパルタ兵を惱ます半月の楯●兵戰の疲弊に乘ずる口舌の才●弱邦を蹂躙する强國の横車●晴天の霹靂議事堂を壓す●元兇免せられて名士戮せらる●祖國の悲運を慨く異境の邂逅●風雲を冒して故國に入る勇士の一團●陰謀將に成らんとして同志數々愕かさる●形成一夜に變ず劍の舞●一將の妄擧大事を釀す●偉傑エパミノンダス(上)偉傑エパミノンダス(下)

第三冊 國士の經綸

版 三

紙數 四三七頁
正價 金八拾五錢
郵税 金拾貳錢

目次

●兩雄角逐の發端●覇邦の强襲を凌ぐテーベ勢の堅忍●梟雄脚を傷けてテーベ彌安し●陸戰に武略を敎へ海戰に休養を與ふ●ペロピダス、テギラに奇効を奏す●同盟國の猜忌媾和を强ふ●衆星一堂に會す平和の談判●陷穽の默契を碎く署名の變更●冷熱相對す兩雄の舌戰●玉碎を決す擧國の義憤●軍氣を鼓舞する親子塚の血祭●偉略既に成る破天荒の新戰術●局面一變するレウクトラの戰●休戰の約成る野心家の仲裁●覇邦の鼎搖くマンチネイアの恢復●同盟の成立スパルタを悶えしむ●北憂除かれて南敵に逼る●嗚呼汝大業の八よ!●スパルタの婦女初めて篝火を見る●强襲を避けて敵の死命を制す●エパミノンダス經綸の双美●妬雲明月を蔽ふ將軍の凱旋●再度の遠征を促す反對同盟●三度遠征を促す無涙の戰●偉人の經綸を破壞する衆愚の淺慮●和平の計畫反つて不和の種となる●友星を救うて將星益々輝く●形勢紛亂す半島の風雲●英雄の活眼新に海軍を興す●小憤に驅られて名士千金の身を捨つ●神前修羅場と化すオリンピアの大祭●神財費消の物議大事に及ぶ●兩雄再び角逐す虛々實々●奇襲功を奏せずに意外の障碍●マンチネイア原頭正々の陣●大業半ばにして英魂逝く●兩雄去つて兩國の覇業亡し●ギリシア國粹理想の實現

第四冊 偉傑の雄飛

版 再

紙數 二二〇頁
正價 金五拾五錢
郵税 金八錢

目次

●敵國を呪ふ少年の誓●傳說と實錄●兩雄並び立たず●電光將軍の經營●偉傑

次

●ハンニバル●兩國勢力の比較●ハンニバルの方略●談判破裂●ローマの方針●ハンニバルの進發●敵前渡河●出し抜かれたるスキピオ●アルプス越（上）アルプス越（中）アルプス越（下）●俘虜の決鬪●兩將の演說●チキヌス河の遭遇戰●騎將敵を侮る●善く戰ふ者は他を致す●トレビヤ河原の大勝●離間の計略●平民黨の首領●防禦と憂虞●難路惡道の進軍●狹路の罠●トラシメヌスの血の湖●物情恟々たるローマ●兩國民の態度の相違●屬國の忠實●戰はずして敵を惱ます●火牛の奇計●小勝凡將を驕らしむ●誘うて敵を懲す

第五冊

偉國民の奮鬪

最新版

紙數 三七一頁
正價 金八拾錢
郵稅 金拾貳錢

目次

●ローマ大兵を動かす●カンネー原頭の殺氣（一）●カンネー原頭の殺氣（二）遊●動軍對固定軍●戰鬪漸く酣なり●ローマ軍包圍さる●全軍潰滅●敵を窮追せず●敗報を得たるローマ市●味方を棄つるの意氣●ハンニバル得意の時●奮鬪能く禍難を轉ず●老スキピオ兄弟戰死●カプアの包圍攻擊●ハンニバル門外にあり●カプア市遂に陷る●英雄スキピオ●奇策カルタゴ＝ノヴアを取る●窮難の底に沈めるローマ●逆運偉傑の身邊に逼る●二統領の戰死●ハネドルバル阿兄の急に赴く●南北の敵に對する配備●密使捕はれて計破る●ネロ咄嗟に妙計を運らす●ハスドルバルの煩悶●メタウルス河畔の合戰●ハンニバル落膽の極●イスパニアの平定●遠征の途奇功を奏す●ローマ軍アフリカに入る●カルタゴ和を請ふ●ハンニバルの歸國●和議成らんとして破る●兩雄の會見●ハンニバルの作戰計畫●スキピオの陣立●ザマの大決戰●請和使スキピオの旗艦に到るルタゴの屈服●ローマ四境に威を揮ふ●偉傑身を以て祖國を去る●シリヤ挫けて志ならず●兩雄の最後●兩大國の榮枯

346
12

終